熊本大学
永青文庫研究センター

年　　報

第17号

２０２６

熊本大学永青文庫研究センター

はじめに

2025年度は、本センター設置以来の宿願であった永青文庫細川家文書の国重要文化財への一括（追加）指定が実現し、それを記念した展覧会や新聞連載に取り組むことになった。11月２日から３日間、熊本大学附属図書館との共催でひらいた第30回貴重資料展では、「永青文庫国重要文化財指定記念展」と銘打って、指定文書等30点余りを展示した。指定文書を取り上げる『熊本日日新聞』紙上の連載「細川家文書を読む」にも、全30回の予定で５月から取材に全面協力している。すべては、国の重要文化財に指定された古文書の内容を市民に周知するための活動である。

先輩教員たちが始めて以来40回の開催を紡いできた貴重資料展は、今回、その長い歴史上最多の来場者532名を集めた。熊日の連載や民放での事前告知報道を見て興味をもち、会場に足を運んだ方も多かったようだ。

参加者アンケートのデータを見ると、注目するべき二つの傾向が読み取れる。

第一に、523名中、20歳未満が45名、20歳代が80名もいることだ。この中には本学の授業中での案内で知って足を運んだ熊大生も一定数含まれるが、学内からの参加者は全年代合わせて99名に過ぎないから、少なくない一般（学外、高校生も含む）の若者が来場している実態があることがわかる。

第二に、次のような自由記述の内容である。

▼展示作品の解説が詳しく書かれていて、展示作品のことがよく分かりました。（10代）

▼パンフレットの解説を見ながら古文書を見ることができ、古文書の内容について理解が深まった。（10代）

▼解説のおかげで、文書の意義をある程度は理解することができ、見ていて楽しかったです。質問にも、一を聞いて十を答えてくださるようなご回答ぶりで、大変嬉しかったです。（20代）

▼全くの無知でしたが、目録のおかげで楽しめました。（30代）

解答者の言う「解説／パンフレット／目録」というのは、毎年の展覧会で参加者に配布する「解説目録」のことで、全出品資料の画像と詳細な解説文を掲載した展覧会図録に準じる冊子である。参加者が歴史資料の現物を見ながら解説を読むことで理解を深めることができるようにするための仕掛けであり、作り手である私たちの力量が問われる。

確かなのは、一定の若者が、例えば生成 AI がもたらすような最大公約数的な情報よりも、史料の現物から自らの眼前に広がってくる歴史のリアルこそを求めているということである。若者にとっての未来への羅針盤となり得る歴史像の構築へ歩みを続けたい。

2026年３月１日

永青文庫研究センター長

稲　葉　継　陽

目　　次

はじめに…… 1

1．年間活動記録…… 4

2．年間活動報告……10
⑴ 組織運営 ……10
⑵ 研究活動 ……10
⑶ 展覧会・講演会・社会貢献等 ……15
⑷ センターの運営資金 ……16

3．個人年間活動……17

4．記者発表要旨……25
⑴ 西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明 ……26
⑵ 幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに
— 行き先は、力士・物取り・新選組など — ……33

5．講演要旨……41
⑴ 稲葉継陽「加藤家改易から細川家入国へ
—「天下泰平」と肥後の民衆—」……42
⑵ 今村直樹「神風連の乱と旧熊本藩主細川家」……45

1．年間活動記録（講演、会議、打合せ、取材等）

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
2025年４月３日	工学部城本・尼崎教授と打合せ	稲葉
４月４日	熊本市博物館木山氏来訪、打合せ	今村
４月９日	熊本日日新聞文化部記者来訪、取材	稲葉
４月10日	TOPPAN と会議（オンライン）	稲葉・後藤
４月12日	裏千家淡交会熊本支部総会にて講演	稲葉
	明治維新史学会例会	今村
４月15日	㈱トータルメディアと打合せ	稲葉
	熊本県文化課長来訪、打合せ	稲葉
４月17日	宰匠古文書修復見積りの打合せ	稲葉・後藤
	東京出張	今村
４月19～20日	放送大学面接授業	今村
４月21日	再春館創立270周年記念事業 WG 会議	今村
４月22～23日	姫路出張	稲葉・後藤
４月21～25日	松井家文書クリーニング作業	今村・髙森
４月25日	URA 推進室福田氏と打合せ	稲葉
４月30日	熊本県文化課木庭・坂井田氏来訪、打合せ	稲葉
	熊本日日新聞鬼束氏来訪、打合せ	稲葉・後藤
５月８日	熊本県教育庁文化課豊永氏と永青文庫常設展示基金について打合せ	稲葉
５月９日	TOPPAN と打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
５月10～11日	高知出張（高知県史）	今村
５月13日	くまもと県民カレッジ開講式講演	稲葉
	熊本日日新聞記者来訪、取材	稲葉
５月14日	読売新聞若林氏来訪、取材	今村
５月15日	都城島津邸山下氏来訪、打合せ	稲葉・後藤
	八代市立博物館来訪、林氏打合せ	稲葉
５月20日	くまもと県民カレッジ講演	今村
	熊本県立美術館宮川氏来訪、打合せ	稲葉
５月22日	永青文庫・文化庁岡村氏来訪、打合せ	稲葉・後藤
５月23日	熊本ロータリークラブ例会講演	今村
５月24～26日	東京・岩手出張（歴史学研究会、史料調査）	今村
５月27～29日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
５月25日	熊本県立美術館・永青文庫来訪、信長文書の展示について打合せ	稲葉・後藤・林田常務理事・萬納館長（永青文庫）

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
6月4日	菊池氏史跡調査検討委員会	稲葉
6月5日	第1回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
	甲佐町教育委員会上高原氏と打合せ	稲葉
	『アジアから考える郷と村（仮)』編集会議	今村
6月7日	熊本史学会春季研究発表大会	今村
6月10日	宰匠修復文書打合せ（於九州国立博物館）	稲葉・後藤
6月11日	熊本日日新聞前田氏来訪、取材	稲葉
6月13～15日	大阪出張（明治維新史学会大会）	今村
6月23～27日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
6月25日	久木野愛林館長沢畑氏来訪	稲葉
6月26日	TOPPANと打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
7月9日	高知県史（オンライン）	今村
7月10日	大阪出張（泉大津市立図書館講演）	今村
7月11日	上野健爾氏来訪、打合せ	稲葉・後藤
7月12～13日	名古屋出張（近現代史研究会大会）	今村
7月15日	出水神社岩水氏打合せ（於出水神社）	今村
7月16～17日	東京出張（永青文庫資料調査）	稲葉・後藤
7月18日	さわやか大学院加藤氏来訪、打合せ	今村
7月22～25日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
7月23日	熊本日日新聞前田記者来訪、取材	Andrew Fischer（外国人客員研究員）
7月26日	熊大ワクワク連続講義	今村
7月25～26日	大阪出張、26日トークイベント「日本文化の継承と魅力発信」（於大阪・関西万博会場）	稲葉・後藤
7月29日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
7月31日	熊本藩士ご子孫・若松氏と古文書寄贈について打合せ	稲葉
8月1日	熊本日日新聞前田記者来訪・取材	稲葉
8月4日	附属図書館浜崎氏打合せ	稲葉
	古文書寄贈者高見氏来学、寄贈文書を解説	稲葉
8月5日	記者発表「西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明」	今村
8月7日	里山ギャラリー村田氏打合せ（於肥後の里山ギャラリー）	今村
8月9～10日	都城島津邸伝承館企画展講演、資料調査	稲葉・後藤
8月17～18日	東京出張（歴史学研究会例会報告）	今村
8月19日	TOPPANとの打合せ（オンライン）	稲葉・後藤

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
８月20～22日	文化財指定のための永青文庫資料調査	稲葉・今村・後藤・髙森・文化庁
８月23日	「口書」科研研究会（於熊本大学）	今村・髙森
	佐敷城調査検討委員会	稲葉
８月24日	「口書」科研研究会山都町巡見	今村・髙森
８月26日	熊本県文化課酒井田・木庭氏来訪、打合せ	稲葉
８月27日	菊陽町文化財保護委員会	今村
８月28～31日	島根出張（島根県古代文化研究センター研究会報告）	今村
	TOPPAN との打合せ（オンライン）	稲葉・後藤
	北國新聞社取材	稲葉
８月29日	熊本日日新聞前田記者来訪、取材	後藤
９月１日	熊本県立図書館田嶋氏来訪、打合せ	稲葉
９月２～３日	古文書整理会（於熊本県文化財資料室）	今村
９月２日	熊本県文化財復興復旧基金配分委員会	稲葉
９月４日	布田家文書借用(於肥後の里山ギャラリー)	今村
	永青文庫常設展示振興基金運営委員会	稲葉
９月12日	読売新聞若林氏来訪、取材	今村
９月16日	菊池関連史跡検討委員会	稲葉
９月17日	多良木町永井氏来訪、打合せ	稲葉
９月19日	NHK スペシャル撮影　於熊本大学・九州国立博物館	稲葉・後藤
９月19～22日	高知出張（高知県史）	今村
９月21日	NHK スペシャル「戦国サムライの城　第２集　家康“巨大城郭”に秘めた夢」放送	
９月24日	熊本日日新聞前田記者来訪、取材	稲葉
９月25日	熊本さわやか大学校講演（於熊本県総合福祉センター）	今村
９月26日	八代市立博物館協議会	稲葉
	熊本さわやか大学大学院講演（於熊本県総合福祉センター）	今村
９月27日	バイオ市民公開講座講演	後藤
９月30日	布田家文書返却	今村
10月８日	古閑家文書調査	今村
10月９日	菊池文化研究発表会	稲葉
10月10日	多良木町永井氏来訪、打合せ	稲葉
10月13日	千葉大小関科研研究会	今村
10月14日	附属図書館森下副課長・浜崎氏打合せ	稲葉

日　付	活　動　内　容	担当・打合せ先等
10月15日	熊本県立美術館宮川氏来訪、打合せ	稲葉、今村
10月17日	熊本朝日放送丸田氏来訪、取材	稲葉
10月18日	講演「天下人の城　安土城」（於　安土城考古博物館）	稲葉
10月19日	シンポジウム「天下人織田信長と安土城」（於滋賀県大津市）	稲葉
10月20～24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
10月21日	馬場楠井手の鼻ぐり保存活用計画策定員会	今村
	熊本日日新聞前田記者来訪・取材	稲葉
10月22日	水前寺成趣園保存活用計画策定委員会	今村
10月23～24日	東京出張（信長発給文書修理打合せ、永青文庫史料調査）	稲葉・後藤
10月28～30日	東京出張（東アジア史料研究編纂機関国際学術会議報告）	今村
10月30日	熊本朝日放送、取材・撮影	稲葉
11月２～４日	第40回熊本大学附属図書館貴重資料展「永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展」	
11月２日	第19回永青文庫セミナー（於附属図書館１階） ①「国の文化財（美術工芸品）保護制度について」講師・岡村一幸（文化庁文化財第一課文化財調査官） ②「加藤家改易から細川家入国へ」講師・稲葉継陽	
11月５日	人吉城跡保存活用専門会議	稲葉
	インタージャム㈱・熊本県立美術館、打合せ（於附属図書館）	稲葉
11月10日	『アジアから考える郷と村（仮）』編集会議	今村
11月15日	川尻米蔵講座（於熊本市川尻公会堂）	今村
11月16日	菊池文化研究発表会	稲葉
11月18日	熊本市歴史文書資料室上村氏来訪、打合せ	今村
11月20日	附属図書館浜崎氏打合せ	稲葉
11月21日	出水神社文書史料調査	今村・髙森
	熊本日日新聞前田記者来訪、取材	稲葉
	熊本県観光文化部小田氏来訪、打合せ	稲葉
11月22～23日	多良木相良関連史跡国指定記念シンポジウム	稲葉
11月25～28日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
11月25日	東京出張（信長発給文書修理打合せ）	稲葉・後藤
11月30日	保田窪一町内文化祭講演	稲葉
12月５日	久留米市文化財収蔵資料審議会	今村
12月７日	日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅤ中・近世移行期の枡と計量行為」	稲葉
12月９日	熊本さわやか大学校講演（於桜十字ホールやつしろ）	今村
12月10日	NHK「歴史探偵　最新の大発見！歴史ニュース2025」放送	
12月11日	宰匠修復文書打合せ（於九州国立博物館）	稲葉・後藤
12月12日	佐敷城調査検討委員会	稲葉
	URA 推進室福田氏、打合せ	稲葉
12月13日	熊本史学会秋季研究発表大会	今村
12月17～18日	東京出張（史料調査）	今村
12月18日	人事課山岡氏、打合せ	稲葉
12月19日	菊池氏関係史跡検討委員会	稲葉
12月20～21日	高知出張（高知県史）	今村
	放送大学集中講義	稲葉
12月25日	古閑家文書搬出作業	今村
2026年１月６日	読売新聞今村記者来訪、取材	稲葉
１月10～12日	高知出張（高知県史、全国史料ネット研究交流集会）	今村
１月13日	八代市立博物館林氏・宮原氏来訪、打合せ	稲葉・後藤
１月14日	文化財研修会講演（於菊陽町総合体育館）	今村
１月15日	永青文庫林田常務理事・有木副館長来訪、打合せ	稲葉・後藤
１月16日	熊本県文化振興課来訪、打合せ	稲葉
１月18日	日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅥ　吉田光由の熊本訪問とその背景」	後藤
１月19日	熊本県文化振興審議会	稲葉
１月20日	熊本大学同友会講演	今村
１月22日	水前寺成趣園保存活用計画策定委員会	今村
１月26～30日	松井家文書目録調査	11人
２月４日	渡辺浩一氏来訪	今村
２月５日	細川護光氏名誉フェロー授与式	今村・林田常務理事（永青文庫）
２月11日	高知県史（オンライン）	今村

日　付	活　　動　　内　　容	担当・打合せ先等
2月14日	里山ギャラリー講座「近世後期熊本藩の椎茸生産と“茸山騒動”」（於肥後の里山ギャラリー）	今村
２月17日	出水神社岩水氏打合せ（於出水神社）	今村
２月21日	放送大学熊本学習センター公開講演	稲葉
	神風連の事件簿関連イベント講演「神風連の乱と旧熊本藩主細川家」（於熊本県立図書館）	今村
２月22日	日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅦ　細川忠利をめぐって」	稲葉
２月24・26～27日	松井家文書目録作成調査	参加人数：11人
２月24日	菊陽町文化財保護委員会	今村
２月28日～３月２日	島根出張（島根県古代文化研究センター研究会報告）	今村
３月４日	水前寺成趣園保存活用計画策定委員会	今村
３月８日	古文書整理会（於熊本県文化財資料室）	今村
３月８日	熊本県立美術館特別講演会	稲葉
３月11日	人吉城跡保存活用専門会議	稲葉
３月12日	馬場楠井手の鼻ぐり保存活用計画策定員会	今村
３月13日	熊本県民文化賞授賞式	稲葉
３月16日	佐敷東の城跡調査検討委員会	稲葉
３月17～19日	国重要文化財指定のための永青文庫史料調査	稲葉・今村・後藤・髙森
３月24日	宇土市轟泉水道等保存活用検討会	今村
３月26～27日	東京出張、永青文庫理事会にて活動報告	稲葉
３月27～29日	高知出張（高知県史）	今村
３月30日	記者発表「幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに」	今村
	「口書」科研研究会（オンライン）	今村・髙森

２．年間活動報告

⑴　組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹准教授が担い、兼務教員として三澤純教授、日高愛子准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が研究・社会発信業務を専任教員と分担し、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）等によって雇用されている技術補佐員、大学院生および学部学生らも、史料のデータ化等の実務にたずさわった。

永青文庫研究センター運営委員会を通じての運営は、おおむね円滑に進められた。

なお、2025年９月４日に熊本県庁で開催された永青文庫常設展示基金活用委員会にて2025年度の事業計画を報告し、あわせて中間報告を行い、承認された。

⑵　研究活動

１）熊本大学に寄託されている永青文庫細川家文書9612点が国重要文化財に指定

2025年９月26日、公益財団法人永青文庫が所有し熊本大学附属図書館に寄託されている貴重資料のうち、歴史資料（以下、永青文庫細川家文書という）9,346通が国重要文化財に追加指定された。

永青文庫細川家文書のうち、織田信長書状群をはじめとする中世文書等266点は、すでに2013年に国重要文化財に指定されている。今回の指定はそれに次ぐもので、細川家の家伝の資料（御家の宝）と位置づけられた、17世紀初期から明治初期に作成された貴重な歴史資料群である。

今次の指定文書の中でも特に注目されるのは、戦国武将として著名な細川忠興（三斎）や、寛永期（1620～30年代）の明君と評価される細川忠利らの発給文書群、忠利やその後継者細川光尚の裁可文書群、寛永末期の細川家代替り（忠利→光尚）に際して家臣たちから相次いで提出された血判起請文（きしょうもん）群、忠利・光尚の相談役であった沢庵和尚が彼らに送った書状群などで、江戸時代初期の歴史資料としては質・量ともに類例をみない。さらに、19世紀に家臣団から藩主に上申された意見書・献策書等を取りまとめた「上書」67冊や、熊本城天守に保管されていた細川家歴代当主の甲冑の廃藩置県に際しての行方を示す証文群など、近世中期以降の貴重な文書も多数含まれる。

今次の国指定は、熊本県教育庁文化課所管の永青文庫常設展示振興基金（2008年設置）から資金配分を受けた熊本大学が、永青文庫研究センターを設置し、公益財団法人永青文庫と協力しながら、2009年から約７年半の歳月をかけて作成した「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」（約５万7,700点分）のデータを基にして実現された。

なお本年度は、指定文書の内容をひろく市民に知っていただくために、本学附属図書館と共催の第40回貴重資料展で「永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展」を開催し、第19回永青文庫セミナーでも関連する講演２本を実施した。また『熊本日日新聞』紙上では2025年６

月から、指定文書30点余りを取り上げた連載「細川家文書を読む」が開始され、2026年２月末の段階で25回まで掲載されているが、これにも永青文庫研究センターとして全面協力している（いずれも後述）。

２）永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度も例年と同様、永青文庫細川家文書について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、細川藤孝・忠興・忠利らの家譜や年譜、近世後期の「口書」などの75点（全18,181カット）である。撮影された画像データは、熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、共同研究推進のための素材として分析が深められる予定である。

３）細川家文書「口書」の細目録作成と共同研究

熊本藩刑法方の年次記録帳簿群である「口書」には、藩領で発生した犯罪・紛争などの被疑者や関係者の供述書と、刑罰の決裁過程に係る文書が収録されている。18世紀前半の正徳２年（1712）から幕末期の慶応３年（1867）まで、全134冊が現存している。「口書」に収録された供述書は基本的に庶民層のものである。

2023年度、「永青文庫細川家文書『口書』の総合的解析による日本近世民衆史の研究」（研究代表者・今村直樹）が、科学研究費補助金基盤研究（B）に採択された。それを受けて本センターは、①「口書」収録事件の細目録作成、②収録事件の分析に基づく共同研究に着手した。

①の作業には、科研費で雇用された髙森荘子が主に従事し、計７冊分、963件分の細目録を作成することができた。そこで見出された知見の一部については、今村直樹「欠落・出奔の幕末社会」（後掲）として論文化し、その内容を紹介するプレスリリースを行った。②では、民衆運動・村落史、流通・経済史、法制史、障害史・女性史などの専門家を集めた研究会を、⑴2025年８月23日、⑵2026年３月30日の２回開催した。報告題目は以下の通りである。

⑴　2025年８月23日　於熊本大学文法学部棟
　今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター）
　　欠落・出奔の幕末社会―細川家文書「口書」から―
　深瀬はるか（くまもと文学・歴史館／熊本県立図書館）
　　近世の村社会のジェンダー構造と女性

⑵　2026年３月30日　オンライン
　三澤　純（熊本大学大学院人文社会科学研究部〈文学系〉）
　　「口書」のその後

４）TOPPNN 株式会社フロンティア事業開発センター事業創発本部研究企画部データベース開発チームとの共同研究によるプロジェクト「永青文庫資料と「くずし字 AI-OCR」の活用による17世紀社会論・公儀権力形成史の再構築」

稲葉継陽を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（C）によって2023年度から開始された本プロジェクトでは、熊本大学に寄託されている永青文庫細川家資料に元和７年（1621）以降18世紀初期まで280冊52,000丁もある細川家奉行所の日報、および関連する記録史料を、

TOPPAN 株式会社が開発した「くずし字 AI-OCR システム　ふみのは」によってテキストデータ化している。

2024年度には「くずし字 AI-OCR」に永青文庫の初期藩政史料の画像データ50,000枚を処理させ、即時検索システムを構築することに成功。このシステムによって、厖大な史料画像から災害関係キーワードを抽出し、洪水と飢饉の一定の相関関係をつきとめることができた。

このシステムを活用することによって、本年度は「近世前期大名領国における転勤大庄屋制の形成過程と百姓―熊本藩の手永・惣庄屋制について―」を成稿した（公表は2026年中の予定）。17世紀前期に完全な世襲制から出発した熊本藩細川家の惣庄屋制が、18世紀中葉に境目５手永を除く全面転勤制へと逢着するまでの事情を、関係史料の集中的検討によって明らかにしようとするもので、社会状況や制度の長期にわたる変化を追跡する上で本システムが有効であることがわかった。

また、2025年７月15日には大阪・関西万博会場内の「TEAM EXPO パビリオン」ステージイベント「日本文化の継承と魅力発信―古文書から読み解く歴史―」に稲葉が登壇し、本システムを活用して作成した講演「近世初期細川家の記録に見る酒とその役割」をプレゼンし、パネルディスカッションに参加して、本研究プロジェクトの内容の周知をはかった。

５）熊本大学所蔵松井家文書の目録作成

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約36,000点が保管されている。本センターは2018年度から、松井家文書の目録作成事業に着手している。

目録作成事業では、センタースタッフのほか学外からの作業従事者も得て、附属図書館で一週間単位の集中調査を７回開催した（総日数29日、延べ人数77人）。その結果、約478点の目録を作成することができた。併せて目録調書のデータ化作業も進め、本年度は約1,200点の調書データの入力を完了した。

６）古閑家文書の目録作成

古閑家文書（古閑幾久子氏所蔵）は、総点数が20,000万点をこえる熊本藩惣庄屋史料の代表的存在である。2016年４月熊本地震の被災後、熊本被災史料レスキューネットワークにより救出され、現在は熊本大学で保管されている。

本センターでは、2019年度から古閑家文書の総合調査を進めてきた。本年度は、文学部の学生３名が作業に従事し、近世一紙文書約945点の目録を作成した。また、2025年12月には、古閑家の蔵に残されていた古文書や書籍についても、熊本大学に搬入した。これらのクリーニング・整理作業も随時行っていく予定である。

７）紀要『永青文庫研究』第9号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』を刊行している。本年度の第９号には、スタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、2025年３月に開催した本センター主催講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」の特集とともに、論文２本（うち１本は英語論文）、書

評１本を掲載することができた。

第９号の目次は以下の通りである。

特集　熊本藩士上田久兵衛と幕末維新

特集にあたって …… 今村　直樹

論　　文

肥後藩京都留守居上田久兵衛の国事周旋活動 …… 白石　　烈

明治維新後の上田休

—王政復古・細川家・西南戦争— …… 今村　直樹

研究ノート

上田久兵衛関係文書と幕末維新史研究 …… 箱石　　大

史料紹介

「上田休応接咄之次第概略書」 …… 三澤　　純

論　　文

紹宅伝再考 …… 竹島　一希

書　　評

三澤純著『幕末維新期民衆の自治と運動』 …… 籠橋　俊光

Article

Wine Production Under House Hosokawa in the 1620s …… GOTO Noriko

Translated by J. F. Henney

８）稲葉継陽編『細川家史料と史跡が伝える 近世初期キリシタンの信仰と逡巡—禁教をめぐる群像—』（勉誠社、2026年3月、全216頁）の刊行

2023～2025年まで『熊本日日新聞』紙上に21回にわたって連載された「細川キリシタン群像」に、既発表の論考２本を加えて再構成した『近世初期キリシタンの信仰と逡巡』を刊行した。

過酷な状況下にあった戦国動乱期以降の日本社会や共同体の形成・変容を考えるとき、16世紀末におけるキリスト教の爆発的拡大と17世紀の禁教の問題は、見落とすことの出来ない重要なテーマである。信仰と禁教の間で、庶民たちは、そして領主や家臣たちは、何を考え、どのように動いたのか。細川家に伝来したキリシタンの動向と禁教政策の実態を示す文書・記録史料を紐解き、各地の貴重な史跡と共に分析・解説。本書は、名もなき信仰者や弾圧者たちの心性を探ることで17世紀の社会と人間に接近しようとする試みである。

本書の構成は以下のとおり。

はじめに　稲葉継陽

第Ⅰ部　細川キリシタン群像　稲葉継陽・鬼束実里

１　禁教令と「転び証文」／十字章の墓 旧領にひっそりと

２「転び」と「立ち帰り」／信仰の深さ 仮想現実で体感

３　細川忠興と加賀山隼人／小倉教会に残る信仰の証

4　転ばぬ重臣　小笠原玄也／宗派の垣根越えて祈り
5　密告賞金制度がもたらしたもの／国際港下の信仰 足跡残る
6　弾圧に芽生えた救い／仏教徒と一緒に弔う
7　「天草四郎」の実像／島原へと続く 静かな有明海
8　天草キリシタン郡浦潜入事件顛末／数百年前の息遣い　今も
9　南有明海域の反乱／一揆緒戦の火ぶた切られる
10　一揆からの脱出者たち／交通の要所 にぎわった宿場町
11　原城総攻撃前夜／丘陵の城　目と鼻の先で対峙
12　救いなき殺戮の戦場／破壊された城跡 大量の人骨
13　原城攻めへの住民動員／石碑に託した平和への願い
14　「四郎首」取った陳佐左衛門／一揆の痕跡 玉名の干拓地史に　四郎が最期迎えた「家」跡
15　大友宗麟三男・松野半斎の生涯／死を目前に最後の祈り
16　「天草五人衆」の子孫たち／南蛮文化繁栄 戦争の拠点にも
17　孤立無援な「デウスの御代」／一揆勢の様子 発掘で浮き彫り
18　島原・天草一揆が日本歴史に残したもの／400年続く供養 平和の尊さ問う
19　牢屋のキリシタンたち／あの世との境目 高麗門
20　一庶民キリシタンの物語／「団子地蔵」今生の別れ惜しむ

第Ⅱ部　論考篇　細川家のキリシタン史料
キリシタン重臣加賀山隼人と細川忠興　稲葉継陽・後藤典子
細川家文書にみる近世初期キリシタン穿鑿の実態―金川惣左衛門同類の穿鑿一件
後藤典子
あとがき　稲葉継陽

9）永青文庫細川家資料の重要文化財指定に向けた集中調査

本センターは、熊本大学寄託永青文庫資料（約５万8,800点）の総目録を2015年に刊行した。この永青文庫資料のうち、織田信長の手紙58通を含む中世文書266通は、2013年６月に国の重要文化財「細川家文書」に指定されている。しかし、266通を除いた資料群の大部分は未指定のままであり、それらの重要文化財指定に向けた永青文庫資料の集中調査（総目録と原資料との照合作業）が、文化庁の指導のもと、2022年度から始められていた。2025年３月、古文書9,346点が重要文化財に追加指定される運びとなったのは、上記集中調査の成果に基づくものである。

近い将来のさらなる「細川家文書」の追加指定に向けて、本年度も2025年８月（20日～22日）と2026年３月（17日～19日）の２度、集中調査を実施した。文化庁、公益財団法人永青文庫、熊本県文化課などの関係者が参加し、総目録の約5,000点分について、原資料との照合作業を終えることができた。

⑶　展覧会・講演会・社会貢献等

１）第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展「永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展」（2025年11月２日～11月４日、附属図書館と共催、於熊本大学附属図書館）

２）第19回　永青文庫セミナー
（2025年11月２日、附属図書館と共催、於熊本大学附属図書館）
講演１　岡村一幸（文化庁文化財第一課文化財調査官）
「国の文化財（美術工芸品）保護制度について」
講演２　稲葉継陽（永青文庫研究センター）
「加藤家改易から細川家入国へ―「天下泰平」と肥後の民衆―」

本年度の貴重資料展は、本センターの稲葉継陽、今村直樹、後藤典子、兼務教員の日高愛子が担当した。本展・セミナーは2025年９月、永青文庫細川家文書9,346通が国の重要文化財に指定されたことを記念しこれを記念して開催された。

指定文書の内容は10頁に示した通りであるが、その中から32点、参考資料３点を展示した。セミナーは、それら展示資料を解説する稲葉の講演と、今次の指定のための確認調査を担当した岡村一幸調査官の講演を実施した。

貴重資料展の入場者数は532名で最高数を更新し、永青文庫セミナーの来聴者は137名であった。

会場で実施したアンケート結果を見ると、回答者424名中20歳未満が45名おり、歴史資料に興味を持つ高校生以下の若者が一定数いることが窺われる。自由意見は157名から得られ、そのほとんどがポジティブな感想であった。

３）熊本県立美術館「細川・美術館コレクションⅢ　武蔵が熊本にやって来た」（2026年２月20日～３月15日）への特別協力

本展は、2022年に永青文庫研究センターによって発見された宮本武蔵の晩年の人物像を示す歴史資料４点等を出品したもので、武蔵が単なる御伽役としてではなく、思想としての兵法の体現者として熊本に招聘されたことを示唆する内容である。本センターからは、これら史料に関する情報とともに、特別講演「宮本武蔵と細川忠利・光尚」を提供して協力した。

４）熊本大学広報戦略室を通じた研究成果の記者発表

本センターは最新の研究成果を発信する手段として、熊本大学広報戦略室を通じたマスコミへの公式発表と熊本大学 HP への掲載、対面での記者発表を実施している。本年度は、以下の２件を発表することができた。

①「西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明」（2025年８月５日）
②「幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに ― 行き先は、力士・物取り・新選組など ―」（2026年３月30日）

①と②の発表内容は本年報の巻末に収録している。①については、熊本日日新聞や熊本のテ

レビ、WEB ニュースで報道され、反響を呼んでいる。

本センターの基礎研究によって得られた新発見、新知見を社会一般に周知する上で有効な手段として、今後も取り組みを続けていきたい。

5）テレビ企画、地元紙への執筆等、マスコミとの連携

NHK 総合テレビ「NHK スペシャル」、「歴史探偵」等の制作協力および出演、これら番組内容の書籍化への協力、地元紙『熊本日日新聞』への連載や寄稿などを通じて、本センターの基礎研究の成果を随時発信した。今後も取り組みを継続したい。

⑷　センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、主に以下の事業費等によった。

①熊本大学　概算要求機能強化促進分プロジェクト経費「熊本藩大名家資料群の総合的分析による日本近世史研究拠点・歴史文化情報発信拠点の発展」

②　日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究（B）

③　日本学術振興会　科学研究費補助金基盤研究（C）

④　熊本県永青文庫常設展示振興基

３．個人年間活動

稲葉継陽

共編著

稲葉継陽編『細川家史料と史跡が伝える 近世初期キリシタンの信仰と逡巡―禁教をめぐる群像』（勉誠社、2026年３月、全216頁）

論文

稲葉継陽「16世紀の戦争暴力と民衆」（服部英雄・貴田潔・曽田菜穂美編『フロイス「日本史」再読』臨川書店、2026年３月刊行予定）。

学術的著述

高森町史編さん委員会『高森町史　歴史編』（2025年３月31日刊行、稲葉執筆部分は162～199頁）

（雑誌等への連載）

稲葉継陽「永青文庫　歴史万華鏡」（120）～（130）（『阿蘇』№1116－1126、2025年４月～2026年2月）

稲葉継陽「歴史をいまに読む」（1）～（5）（『熊本保険医新聞』599－604号、2025年10月～３月）

稲葉継陽「細川家文書の世界」（25）～（27）（『季刊永青文庫』№126－128、2025～2026年）

（講演録）

稲葉継陽「織田信長研究の最前線―「室町幕府の滅亡」と「本能寺の変」―」（『第124回九州医師会医学会記録　2024熊本』熊本県医師会、2025年12月、29～45頁）

（展覧会解説目録の執筆・編集）

熊本大学永青文庫研究センター編『第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録　永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展』（熊本大学附属図書館、2025年10月、全34頁）

開催セミナー、シンポジウム、展覧会

2025年11月2日～11月４日　第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展「永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展」

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

2025年11月２日　第19回永青文庫セミナー

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

その他（外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

人吉市指定文化財等保存活用専門会議（人吉城跡部会）専門指導員、佐敷城跡調査検討委員（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊池氏関連史跡調査検討委員（菊池市）、国史跡棚底城跡整備検討委員（天草市）、国史跡陣内城跡整備検討委員（甲佐町）、永青文庫常設展示振興基金運営委員（熊本県教育庁文化課）、熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化振興審議会長、放送大学熊本学習センター客員教授、熊本被災史料レスキューネットワーク代表

（講演等）

2025年４月12日　裏千家淡交会熊本支部総会　講演会
タイトル「千利休と細川家」
会場：熊本市国際交流会館

2025年５月13日　2025年度　くまもと県民カレッジ　開講式　講演会
タイトル「熊本藩政における公共医療行政の萌芽とその担い手―北里柴三郎によせて―」
会場：くまもと県民交流館パレア

2025年７月15日　「TEAM EXPO パビリオン」ステージイベント「日本文化の継承と魅力発信―古文書から読み解く歴史―」
タイトル「近世初期細川家の記録に見る酒とその役割」
会場：大阪・関西万博会場内　フューチャーライフヴィレッジ内「TEAM EXPO パビリオン」ステージ

2025年８月９日　都城島津伝承館企画展「都城地域の戦争と平和―古代から西南戦争まで―」講演会
タイトル「天下泰平を支えた先人たち―その言葉に学ぶ―」
会場：都城市コミュニティセンター

2025年10月18日　滋賀県立安土城考古学博物館　秋季特別展記念対談「天下人の城　安土城」
藤田達生氏と対談
会場：滋賀県立安土城考古博物館

2025年10月19日　「幻の安土城」復元プロジェクト・歴史セミナー
「シンポジウム　天下人織田信長と安土城」（主催：滋賀県文化財保護課）
タイトル：「織田信長の政治―経済政策・宗教政策―」
会場：コラボしが21（滋賀県大津市）

2025年11月２日　第19回　永青文庫セミナー
タイトル「加藤家改易から細川家入国へ」
会場：熊本大学附属図書館

2025年11月23日　祝！多良木相良氏遺跡国史跡指定記念シンポジウム　記念講演
タイトル「いまにのこる多良木相良氏の痕跡」
会場：多良木町研修センター

2025年11月30日　西原一町内文化祭
タイトル「保田窪地鉄炮衆の役割と活躍―AI による古文書解読を踏まえて―」
会場：西原一町内公民館（熊本市東区）

2025年12月７日　日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅤ」
タイトル「中世の枡と計量行為」

2025年２月21日　令和７年度　第９回　放送大学熊本学習センター公開講演会

タイトル「戦国時代の村のモニュメント―石造物の銘文による肥後戦国の民衆史―」
会場：放送大学熊本学習センター３階大講義室
2026年２月22日　日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅦ」
タイトル「細川忠利の国づくり」
2026年３月７日　「細川・美術館コレクション３」関連イベント特別講演会
タイトル「宮本武蔵と細川忠利・光尚」
会場：熊本県立美術館本館　文化交流室

（トークショー　コーディネーター）

2025年11月３日　「芦北町　文化講演会　千田嘉博氏×春風亭昇太氏による中世・近世２つの「佐敷城」トークショー」
会場：芦北町民総合センター／しろやまスカイドーム

（テレビ出演）

2025年９月21日　NHK スペシャル「戦国サムライの城　第２集　家康“巨大城郭”に秘めた夢」
2025年12月10日　NHK「歴史探偵　最新の大発見！歴史ニュース2025」

（新聞連載への取材協力）

「細川家文書をよむ」（『熊本日日新聞』2025年６月～2026年２月末まで25回）

今村直樹

論文

今村直樹「近代移行期の地域社会と身分制解体」（『歴史評論』901、2025年５月、31－42頁）
今村直樹「西南戦争と細川家・水前寺（上）―砂取絞蝋所『明治十年変動中日記等写』について―」（『熊本史学』105、2025年８月、31－60頁）
今村直樹「欠落・出奔の幕末社会―細川家文書『口書』を素材に―」（『人文科学論叢』6、熊本大学大学院人文社会科学研究部〔文学系〕、2026年3月、129－151頁）
今村直樹「明治維新後の上田休―王政復古・細川家・西南戦争―」（『永青文庫研究』9、2026年３月、23－42頁）

学会発表

2025年８月17日　歴史学研究会日本近世史部会2025年度大会批判報告会（会場：東京大学本郷キャンパス）
タイトル「加賀藩十村と熊本藩惣庄屋のあいだ―上田長生氏報告批判―」
2025年８月23日　細川家文書「口書」科研研究会（会場：熊本大学文法学部棟本館）
タイトル「欠落・出奔の幕末社会―細川家文書『口書』から―」
2025年８月30日　「幕末維新期の島根における地域社会の変容」第５回検討会（会場：隠岐の島町役場）
タイトル「幕末維新期の領主権力と中間層―浜田地域を事例に―」
2025年10月28日　第８回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議「アジア歴史資料の保全と

学術資源化」（会場：東京大学本郷キャンパス）
タイトル「熊本地震後の歴史資料保全と災害史研究―熊本大学永青文庫研究センターの取り組み―」

2026年３月１日　「幕末維新期の島根における地域社会の変容」第６回検討会（会場：島根県古代文化センター）
タイトル「幕長戦争と地域社会の変容―浜田地域を事例に―」

学術的著述

（自治体史）

高森町史編さん委員会編『高森町史　歴史編』（高森町、2025年３月、全288頁）第５章第２節１・２、第６章第１節３・４・５・８、第６章第２節３・４・５

（講演録）

今村直樹「通潤橋を生んだ熊本藩政と地域社会」（『国宝指定＆架橋170周年記念　国宝通潤橋　講演会・シンポジウム記録誌』山都町教育委員会、2025年３月、53－63頁）

（一般書）

今村直樹「【肥後藩】幕末京都における薩摩藩批判勢力の中心的存在」（町田明広編『幕末維新期への招待　全国諸藩編』山川出版社、2025年９月、176－185頁）

（展覧会解説目録）

熊本大学永青文庫研究センター編『第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録　永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展』（熊本大学附属図書館、2025年10月、全34頁）史料番号24、25、26、31、参考３

（研究ノート）

今村直樹「天保・弘化期の実学党と横井小楠―熊本大学附属図書館貴重資料展『小楠に届いた手紙―横井小楠文書にみる幕末群像―』の紹介―」（『明治維新史研究』25、2026年３月）

（史料紹介）

今村直樹「幕末維新期熊本藩の『富国』論と民政課題―細川家文書『上書』から―」（小関悠一郎編『近世・近代日本の「仁政」「富国」論―改革の理念と政治・社会―』千葉大学教育学部小関研究室、2026年３月、126－142頁）

（展示原稿）

今村直樹「近世地域社会から近代地方制度へ―自治と官治のはざま―」（国立歴史民俗博物館第５展示室「近代」めくり原稿『民権と地域・民権と民衆』、2026年３月）

（報告要旨）

今村直樹「加賀藩十村と熊本藩惣庄屋のあいだ―上田長生氏報告批判―」（『歴史学研究月報』795、2026年３月、４－５頁）

（その他）

今村直樹「特集にあたって」（『永青文庫研究』９、2026年３月、１－２頁）

今村直樹「『高森町史　歴史編』近現代（第６章）の見どころ」（『広報たかもり』掲載号未定、高森町）

開催セミナー、展覧会

2025年11月２～４日　第40回熊本大学附属図書館貴重資料展「永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展」

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

2025年11月２日　第19回永青文庫セミナー

主催：熊本大学附属図書館・熊本大学永青文庫研究センター

その他（外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

熊本県立美術館収集委員会委員、水前寺成趣園保存活用計画策定委員、宇土市轟泉水道及び旧高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、菊陽町文化財保護委員、馬場楠井手の鼻ぐり保存活用計画策定委員（菊陽町）、久留米市文化財収蔵資料審議会委員、高知県史編さん専門部会（近世部会）委員、島根県古代文化センター客員研究員、放送大学非常勤講師、明治維新史学会理事、近現代史研究会編集委員会委員、熊本被災史料レスキューネットワーク事務局次長、熊本史学会事務局長

（講演）

2025年５月20日　くまもと県民カレッジ　熊本学
タイトル「西南戦争と旧熊本藩士―党薩隊・鎮撫隊・細川家―」
会場：くまもと県民交流館パレア

2025年５月23日　熊本ロータリークラブ例会　卓話
タイトル「熊本藩士上田久兵衛の幕末維新」
会場：熊本ホテルキャッスル

2025年７月10日　地域の歴史・文化再発見講座
タイトル「お米が変えた江戸時代―熊本藩細川家と大坂―」
会場：泉大津市立図書館

2025年７月26日　熊大ワクワク連続講義
タイトル「もう一つの明治維新―幕末の熊本藩がめざしたもの―」
会場：熊本大学全学教育棟

2025年９月25日　熊本さわやか大学校
タイトル「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」
会場：熊本県総合福祉センター

2025年９月26日　熊本さわやか大学校大学院
タイトル「細川重賢と宝暦の改革」
会場：熊本県総合福祉センター

2025年11月25日　2025年度川尻米蔵講座
タイトル「上田休と西南戦争―川尻鎮撫隊・細川家・地域社会―」
会場：川尻公会堂

2025年12月９日　熊本さわやか大学校
タイトル「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会」

会場：桜十字ホールやつしろ

2026年１月14日　熊本県文化財保護協会　第８回文化財研修会
タイトル「近世後期の用水管理組織と地域社会―馬場楠井手を事例に―」
会場：菊陽町総合体育館

2026年１月20日　熊本学園大学経済同友会・熊本大学同友会合同新年会
タイトル「ラフカディオ・ハーンと明治の熊本」
会場：ワン・ステーションホテル熊本

2026年２月14日　里山ギャラリー「永青文庫研究の最前線」
タイトル「近世後期熊本藩の椎茸生産と“茸山騒動”」
会場：肥後の里山ギャラリー

2026年２月21日　記念講演会「神風連の事件簿―150年目にひらく士族決起の記録―」
タイトル「神風連の乱と旧熊本藩主細川家」
会場：熊本県立図書館

（記者発表）

2025年８月５日　「西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明」
発表会場：熊本大学工学部１号館

2026年３月30日　「幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに」
発表会場：熊本大学工学部１号館

後藤典子

論文

Wine Production Under House Hosokawa in the 1620s By Gotō Noriko
Translated by J. F. Henney：『永青文庫研究』９、2026年３月

学術的著述

（展覧会解説目録）

熊本大学永青文庫研究センター編『第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録　永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展』（熊本大学附属図書館、2025年10月、全34頁）史料№14、15、32

（新聞連載）

後藤典子「一筆」⑴―⑿（『熊本日日新聞』2025年10月～12月）

（書籍編集協力）

稲葉継陽編『細川家史料と史跡が伝える 近世初期キリシタンの信仰と逡巡―禁教をめぐる群像』（勉誠社、2026年３月、全216頁）

NHK スペシャル取材班『新・戦国史　城から迫る乱世の終焉、泰平のはじまり』（NHK 出版新書、2026年３月刊行予定）

講演等

2025年９月27日　第37回バイオ市民公開講座　発酵
「永青文庫が語る　知らざれる醸造の歴史」

タイトル「1620年代　細川家のワイン製造とその背景―永青文庫の古文書から―」

2026年１月18日　日本数学協会 Zoom 講義「塵劫記をめぐってⅥ」
タイトル「吉田光由の熊本訪問とその背景」

テレビ出演

2025年９月21日　NHK スペシャル「戦国サムライの城　第２集　家康“巨大城郭”に秘めた夢」

2025年12月10日　NHK「歴史探偵　最新の大発見！歴史ニュース2025」

日高愛子

論文

嚴茹蕙・日高愛子「東アジアにおける文化表象としての端午節の菖蒲」（『淡江日本論叢』第50輯、2025年11月）

研究発表

2025年11月１日　東アジア日本研究者協議会第９回国際学術大会（会場：翰林大学（韓国））
タイトル「日中韓における正月七日の節会の文化的展開」

学術的著述

（展覧会解説目録）

熊本大学永青文庫研究センター編『第40回　熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録永青文庫細川家文書　国重要文化財指定記念展』（熊本大学附属図書館、2025年10月、全34頁）資料№27、28、29、30、参考１

三澤　純

著書（単著）

三澤純『幕末維新期民衆の自治と運動』（小さ子社、2025年）

学術的著述

三澤純「幕末維新期民衆の自治と運動―現代の視点から―」（『暮らしと自治　くまもと』第232号、2026年）

三澤純「熊本県庁文書『公文類纂』に見る明治初年の『行き倒れ』史料」（『部落問題研究』第256輯、2026年）

三澤純「史料紹介『上田休応接ノ次第概略書』」（『永青文庫研究』第９号、2026年）

その他（外部委員、社会貢献等）

（外部委員）

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護　委員、熊本県高等学校生徒地歴・公民科研究発表大会審査員、御船町教育委員会「中道橋」復旧検討委員会委員長

（講演）

2025年11月17日　第14回連続セミナー「幕末維新期民衆の自治と運動―現代の視点から―」

主催：くまもと地域自治体研究所主催
会場：於くまもと県民交流館パレア・会議室４

2025年12月12日　2025年度第７回文化財保護研修会「舟運と往還による地域運営―中道橋架橋の背景から学界の争点へ―」
主催：熊本県文化財保護協会
会場：於御船町カルチャーセンター大会議室

４．記者発表要旨

⑴ 西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明

⑵ 幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに
　― 行き先は、力士・物取り・新選組など ―

熊本大学
Kumamoto University

令和７年７月25日

報道機関　各位

熊本大学

【記者発表のご案内】

西南戦争が水前寺地域に及ぼした影響を解明

（ポイント）

- 明治10年（1877）の西南戦争が水前寺地域（熊本市中央区）に及ぼした影響が、細川家史料の分析から明らかになりました。
- 交通の要衝であった水前寺地域は、明治10年2月の西郷軍の熊本侵入にともない、県庁の移転候補となりました。また、同4月には立て続けに三度も戦場となり、地域住民の多くが避難する事態となりました。
- 水前寺成趣園（じょうじゅえん）の御茶屋「酔月亭（すいげつてい）」は西南戦争で焼失しましたが、具体的には政府軍の放火で焼失した事実が判明しました。

［記者発表について］

本研究成果について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、準備の都合上、別紙「連絡票」により、8月1日（金）17：00までに、熊本大学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

・日時：令和７年８月５日（火）10：00～11：00（予定）

・場所：熊本大学工学部１号館２階共用会議室Ａ

（熊本市中央区黒髪2-39-1）

（概要説明）

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授らは、西南戦争時における旧熊本藩主細川家の記録「明治十年変動中日記等写」を分析しました。その結果、水前寺地域をめぐる以下の新事実が明らかになりました。

① 明治10年2月19日、西郷軍の侵入を控えた熊本鎮台は、戦略上の観点から熊本市中に放火し、焼き払います。それにともない、当時古城（ふるしろ）にあった熊本県庁は最終的に御船へ移転しますが、移転先の候補には、細川家の砂取（すなとり）絞蝋所（こうろうしょ）（現旧熊本市立体育館跡地広場）があげられていました。

② 交通の要衝であった水前寺地域は、熊本城から脱出した政府軍vs西郷軍（4月8日）、川尻を追われた西郷軍vsそれを追う政府軍（4月14日）、砂取絞蝋所などに駐留した政府軍vs健軍・保田窪などに展開した西郷軍（4月20日）というように、短期間のうちに三度も戦場となりました。その結果、多くの地域住民が避難を余儀なくされました。

③ 当時の水前寺成趣園には、1670年代に建てられた御茶屋「酔月亭」があり、それが西南戦争で焼失した事実は知られていましたが、具体的な経緯は不明でした。しかし、上記史料の分析により、4月8日、熊本城から脱出した政府軍（突囲隊）による放火で焼失した事実が判明しました。

本研究の意義は、水前寺地域における西南戦争の展開とともに、当該地域の住民や細川家の関係者からみた戦争の実像を、初めて本格的に明らかにしたことにあります。

（説明）

［本研究の背景］

本研究で分析した「明治十年変動中日記等写」（以下、本史料）は、永青文庫細川家史料「明治十年 日誌」（目録番号11.5.21）に綴じ込まれた全49丁の記録です（**史料1**）。本史料を作成したのは、旧熊本藩主細川家が経営していた砂取絞蝋所です。これは、江戸時代の熊本藩による製蝋所を、明治維新後に細川家が継承したものでした。砂取絞蝋所は、現在の旧熊本市立体育館跡地広場（現熊本市中央区水前寺公園）にあり、周辺には水前寺成趣園や細川内膳家の邸宅である砂取細川邸（現熊本県立図書館／くまもと文学・歴史館）がありました。水前寺地域は、熊本と木山をつなぐ木山往還のルート上にあり、水運で川尻ともつながる交通の要衝でした。

本史料は、明治10年の砂取絞蝋所の日記などから、西南戦争関係の記事が抜粋され、翌11年11月に作成されました。明治10年2月17日から9月28日までの記述があります。本史料の存在は、2007年時点で知られていましたが、その後本格的に分析されることがなかったため、今村准教授らは2021年6月から解読作業に着手していました。

［前提知識①―西南戦争と熊本県庁の移転］

2月15日、西郷軍は鹿児島を出発します。西南戦争の始まりです。同18日、先発隊は水俣に到着しました。

西郷軍の侵入を前にした同19日、熊本城が炎上します。さらに同日、熊本鎮台は、戦略上の観点から熊本市中に放火し、家並みや街並みを焼き払います（いわゆる「射界の清掃」）。これにともない、当時熊本城内の古城にあった県庁は移転を余儀なくされます。19日午後5時、県庁は御船に移転しまし

た。しかし、戦争の影響による周囲の不穏な状況から、21日に山鹿、23日に南関、3月25日に高瀬へと移転を繰り返します。最終的に古城に戻ったのは、熊本城攻防戦が終了した4月16日でした。

［前提知識②―熊本城攻防戦と突囲隊］

熊本に侵入した西郷軍は、熊本鎮台が置かれた熊本城を攻撃し、2月22日から熊本城攻防戦が始まりました。攻防戦は長期化し、やがて城内では食糧が不足するようになります。

そのため、熊本鎮台は城外の政府軍との連絡を模索し、4月8日、鎮台の奥保鞏（おくやすかた）少佐は、川尻・八代方面にいた政府軍（衝背軍（しょうはいぐん））と合流すべく、一大隊を率いて城外に突出しました（突囲隊）。突囲隊は、安巳橋（あんせいはし）周辺の西郷軍を突破し、宇土（宇土市）で衝背軍と合流することに成功します。その結果、4月15日、衝背軍は熊本城への入城を成功させ、約50日間におよんだ熊本城攻防戦は終結することとなります。

［前提知識③―西南戦争最大の野戦となった城東会戦］

4月13日、御船と川尻が衝背軍に占領されると、西郷軍は本営を二本木から木山に移すことを決め、熊本城の攻囲を解き、一斉に退却を始めます。木山を本営とする西郷軍は、熊本城の東方にあたる大津・長嶺・保田窪・健軍・御船の各方面に兵力を展開しました。これを政府軍が攻撃したことで起こったのが、4月19・20日の城東会戦（じょうとうかいせん）です。西郷軍と政府軍の総兵力が激突した西南戦争最大の野戦でした。

城東会戦では、西郷軍が優勢な戦場もありましたが、本営の木山が危機的状況になったため、西郷軍は矢部に撤退します。城東会戦の勝利で、西南戦争における政府軍の優位は揺るぎないものとなりました。

［本研究の内容①―県庁の移転候補となった砂取絞蝋所］

本史料によれば、2月19日の午前中、県庁の官員2名が砂取絞蝋所を訪れ、移転先として借り受けたいと交渉しています。しかし、見分の結果、県庁としては手狭であったため、県官2名は別の候補地（健軍）に向かいました。但し、直後には県の監獄（のちの熊本監獄。当時は手取本町に存在）の監守も絞蝋所を訪問し、懲役人たちを収容するため、明き倉庫の借用を求めています。結果、20・21日の二日間、懲役人たちは空き倉庫に滞在しました。

古城から御船への県庁の移転は知られていますが、砂取絞蝋所という水前寺地域の施設が、御船に先行して移転候補地にあげられていた点は新知見です。また、県庁同様に移転を余儀なくされた県の監獄が、実質的に砂取絞蝋所に一時移転していた点も興味深い新事実です。

［本研究の内容②―短期間でたびたび戦場となった水前寺地域］

本史料によれば、明治10年4月、水前寺地域は三度も戦場となりました。

第一に、熊本城から脱出した突囲隊と西郷軍との接触があった4月8日です。安巳橋を突破した突囲隊は、水前寺を経由して御船方面に向かいました。その際、突囲隊は砂取橋（現熊本市中央区出水）の周辺で西郷軍に発砲しています。突囲隊は無事に通過しましたが、この日の出来事について絞蝋所の関係者は、「いったんは激しく仰天した」と記しています。

第二に、川尻を追われた西郷軍とそれを追う衝背軍が衝突した4月14日です。この日、西郷軍約200名が砂取橋に集まっていたところ、川尻から登ってきた政府軍が、江津塘（えづども）（加勢川右岸の堤防）から激しく砲撃しました。これに驚いた絞蝋所の関係者は、安置されていた秋葉社や稲荷社などを背負って避難しました。本史料では、この日の戦闘を「砂取戦争」と記しています。

第三に、砂取絞蝋所などに駐留する政府軍が健軍などの西郷軍を攻撃した城東会戦の4月20日です。政府軍は、4月17日から絞蝋所やその周辺に駐留していました。20日には、政府軍による激しい砲撃が行われる一方、西郷軍の反撃も激しく、絞蝋所関係者は「政府軍が負けるかもしれないと思うほどであった」と記しています。西郷軍の撤退後、関係者は戦争からの解放を大いに喜びました。

さらに注目されるのは、上記の「砂取戦争」などの影響で、当時の地域住民たちが一斉に避難していた事実です。熊本県公文類纂（こうぶんるいさん）（熊本県立図書館所蔵）にある当時の記録には「地域住民たちが恐怖のあまり逃亡した」とあります（丸山伸治氏のご教示による）。相次ぐ戦闘は、水前寺地域を恐慌状態に陥らせるものでした。

［本研究の内容③―突囲隊が焼失させた御茶屋「酔月亭」］

熊本藩主細川家の庭園であった水前寺成趣園には、1670年代に建てられた「酔月亭」という御茶屋がありました。その跡地には、大正元年（1912）に「古今伝授の間」という建物が移築され、現在に至っています。

『県社出水神社略誌』（県社出水神社社務所、1935年）が、「明治10年の戦争による兵火で酔月亭が焼失した」とするように、酔月亭が西南戦争で失われた事実は知られていましたが、その詳しい経緯は不明でした。しかし、本史料には「4月8日の午前6時ごろ、突囲隊の兵士6,7名がやって来て、酔月亭（元御茶屋）に火をかけた」と記されています（**史料2**）。突囲隊は、熊本城に残った兵士たちに自らの進路を知らせるため、酔月亭に放火したのです。

西南戦争当時、酔月亭が焼失した経緯は、周知の事実であったと考えられます。しかし、その後は明治政府への憚りもあり、政府軍（突囲隊）の放火という点は伏せられ、やがて忘却されていったものと考えられます。

［本研究の意義］

本研究には、以下の2点の意義があります。

① ほぼ未解明であった水前寺地域の西南戦争を明らかにしたこと

水前寺地域の西南戦争については、前掲『県社出水神社略誌』に記されたように、水前寺成趣園の酔月亭の焼失、あるいは砲台を築くために富士築山（つきやま）が破壊されたことは知られていました。しかし、それ以外の事実が知られることはなく、水前寺地域はあまり西南戦争の影響がなかった、という印象が強いものと思われます。

これに対して、本研究では交通の要衝であり、細川家の拠点が置かれた水前寺地域が、熊本県庁の移転、突囲隊の脱出、城東会戦などの重要な局面で、西南戦争の大きな影響を受けていた事実を明らかにしました。西南戦争や水前寺地域の知られざる史実に新たな光をあてたことに意義があります。

② 民衆史の視点に基づく西南戦争研究への寄与

近年の西南戦争研究では、非戦闘員である民衆に戦争が何をもたらしたのかを追究すべき、との提起がなされています。本研究は、そうした提起に答え、地域や民衆が経験した西南戦争の意味を問うものとなっています。

いったん戦争が起これば、地域や民衆には具体的にいかなる影響がもたらされるのか。本史料は、そのような想像力を喚起させるものでもあります。熊本市民にとっても馴染み深い水前寺地域の約150年前の経験を通じて、突如として混乱状況に置かれ、一日も早く戦争の終結を求めた先人たちの姿を想起してもらえれば幸いです。

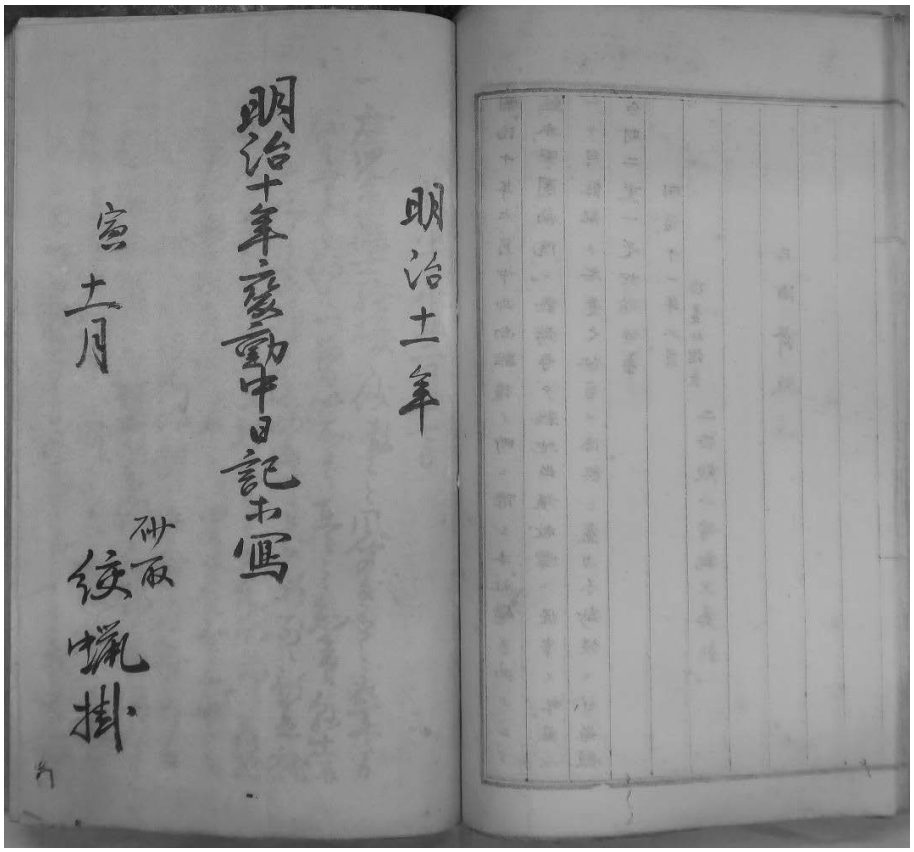
［用語解説］

※西南戦争…明治10年（1877）、西郷隆盛が率いた鹿児島県士族を中心とする反乱。征韓論に敗れて帰郷した西郷が、士族組織として私学校を結成。政府との対立がしだいに高まり、ついに私学校生徒らが西郷を擁して挙兵、熊本鎮台を包囲したが、政府軍に鎮圧され、西郷は郷里の城山で自刃した。明治政府に対する不平士族の最後の反乱。西南の役。

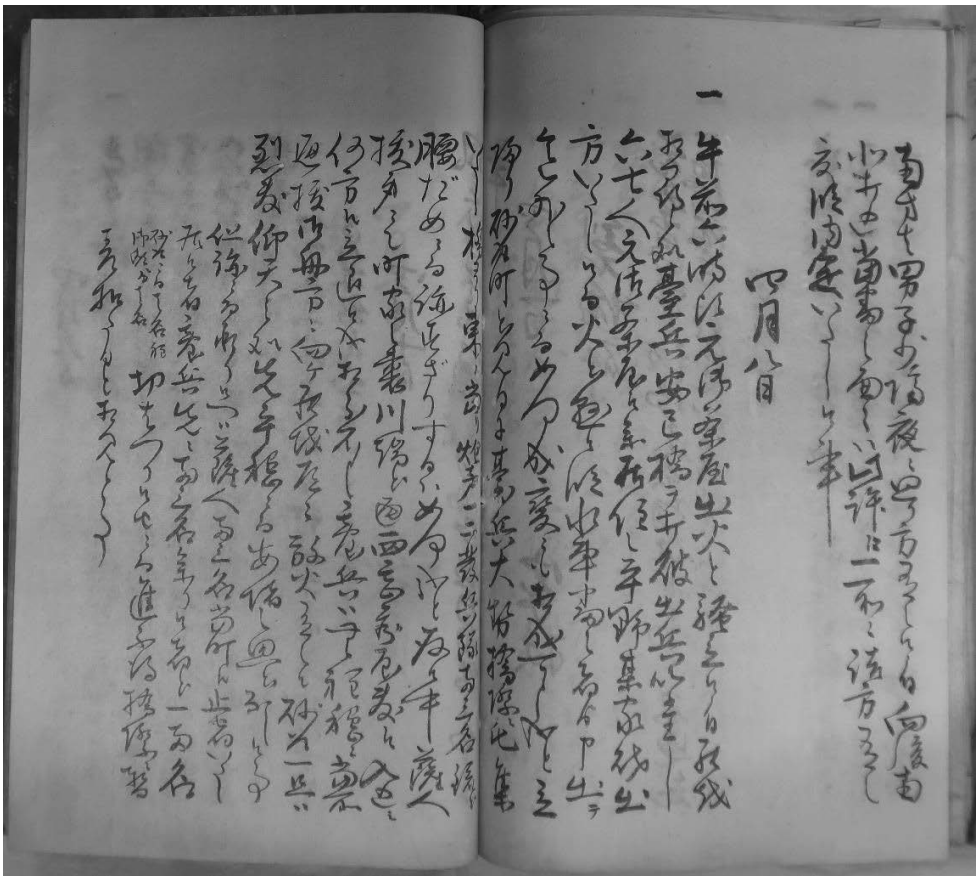
［公開情報］

「明治十年変動中日記等写」の解説および一部の翻刻文からなる今村直樹「西南戦争と細川家・水前寺（上）―砂取絞蝋所『明治十年変動中日記等写』について―」が、2025年8月下旬に刊行される『熊本史学』第105号（熊本史学会発行）に掲載予定です。

史料1　「明治十年変動中日記等写」表紙



史料2　「明治十年変動中日記等写」4月8日条



【研究・資料に関するお問い合わせ先】
熊本大学永青文庫研究センター
担当：准教授　今村　直樹
電話：096-342-2301
e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp

【報道に関するお問い合わせ先】
熊本大学総務部総務課広報戦略室
電話：096-342-3271
e-mail：sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学
Kumamoto University

令和８年３月１９日

報道機関　各位

熊本大学

【記者発表のご案内】

幕末期熊本藩の領外欠落者の実像を明らかに
――行き先は、力士・物取り・新選組など――

（ポイント）

- 幕末期の細川家文書「口書（くちがき）」の分析から、藩領外で欠落（かけおち）・出奔した当該期の熊本藩領民の実像を明らかにしました。
- 幕末期、熊本藩は京都の警衛を命じられたことから、武士の従者として多くの武家奉公人（足軽・中間（ちゅうげん）・小者）が上京し、その結果、京都での欠落者が増加しました。
- 欠落者の多くは、日雇い労働者となって生計を立てましたが、力士になる者や、商家で脅して金品を奪う押借りなどを行い、治安を悪化させる者もいました。
- 特徴的な事例として、武士への取り立てを勧誘されて江戸まで出奔した百姓や、大坂で欠落し、新選組に入隊した郷士（在御家人）がいました。

［記者発表について］

本研究成果について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、準備の都合上、別紙「連絡票」により、3 月 26 日（木）17：00 までに、熊本大学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

・日時：令和 8 年 3 月 30 日（月）10：00～11：00（予定）

・場所：熊本大学工学部１号館２階共用会議室 A

（熊本市中央区黒髪 2-39-1）

※対面・オンラインのハイブリット形式で実施いたします。オンラインでの参加を希望される方には 3 月 27 日（金）17：00 までに、連絡票記載のメールアドレスに、参加 URL を共有させていただきます。

（概要説明）

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授らは、2023年度から科学研究費補助金の交付を受け、細川家文書「口書」の総合的研究に取り組んできました。

「口書」とは、熊本藩の刑事法制担当部局（刑法方）が作成した史料群です。庶民を主な対象として、藩領内外で発生した犯罪・事件などの被疑者の供述調書が収録されています。供述調書には、犯罪や事件に至る経緯のほか、被疑者の心情や周囲の関係も記されており、情報量は極めて豊富です。

今村准教授らが、幕末期（文久3年〔1863〕～慶応3年〔1867〕）の細川家文書「口書」（全10冊）を分析したところ、以下の新事実等が明らかになりました。

① 欠落・出奔（以下、「欠落」）とは、無届での逃亡・失踪・移住を意味します。熊本藩でも、江戸時代を通じて欠落は多くみられました。しかし幕末期になると、京都における武家奉公人などの欠落の事例が急増します。その理由は、朝廷から京都警衛を命じられた熊本藩が、文久2年から多くの武士を京都派遣したことにともない、その従者として多くの武家奉公人も上京したためでした。

② 供述調書によると、藩領外での欠落の主な理由は、主に藩邸の門限などへの遅刻や、問題を起こして郷里の家族や親族に合わせる顔がない、というものです。欠落後、彼らの多くは、日雇稼ぎに従事しますが、相撲取りに弟子入りする者もいました。また、京都での人斬りの横行がもたらす町人の恐怖心に付け入り、押借りを行った足軽も確認できます。

③ 幕末期の時代相を象徴する事例として、武士になることを目指し、江戸まで出奔した百姓や、大坂で欠落した後、新選組に入隊した郷士があげられます。前者の欠落理由は、水戸徳川家から武士に取り立てられると、知人に勧誘されたためですが、実際は強盗集団の仲間集めのための勧誘でした。後者は、江戸に留学し、福澤諭吉の英学塾で学んでいた郷士が、遊郭でトラブルを起こして捕らえられ、国許に移送される途中の大坂で欠落し、食べていくために新選組へ入隊したものです。

（説明）

［本研究の背景①――細川家文書「口書」について］

本研究で分析した「口書」は、熊本藩の刑事法制担当部局である刑法方による記録帳簿群です（**史料1**）。18世紀前半の正徳2年（1712）から幕末期の慶応3年（1867）まで、全134冊が現存しています。「口書」には、1冊あたりの総丁数が2,000丁を超え、収録事件の数が150件以上におよぶものもあります。収録されている供述調書は基本的に庶民層であり、熊本藩の下級武士や武家奉公人なども含まれています。

彼らの供述調書には、事件や犯罪に至る詳細な経緯のほか、被疑者の心情、周囲の人間関係などが記され、情報量は極めて豊富です（但し、「口書」に収録された

事件は、あくまで被疑者が捕縛・自首の上で処罰対象となったものに限られ、実際に起こった事件・犯罪の氷山の一角である点に注意する必要があります。）。本来、記録を残しにくい階層の人びとの証言録であり、庶民史料として非常に貴重な存在です。

しかし、分量が厖大な事情もあり、これまで「口書」を対象とするまとまった研究は行われていませんでした。そこで、永青文庫研究センターの今村准教授らは、2023年度から科学研究費補助金の交付を受け、学外の研究者とともに、「口書」の総合的研究に着手しました。最も重要な基礎作業は、「口書」に収録された事件ごとに、件名目録を作成する作業になります。

［本研究の背景②――熊本藩領民の欠落について］

欠落とは、現住地などから、無届のまま逃亡・失踪・移住する行為をさします。近世後期熊本藩の場合、庶民による欠落が生じると、その家族や村役人などが一定期間捜索を行い、見つからない場合、欠落した旨の届出が藩に出されました。

欠落が起こったのは、どのような場所だったのでしょうか。幕末期（文久3年〔1863〕～慶応3年〔1867〕）の「口書」（全10冊）を分析したところ、欠落を理由に罰せられた事件（全60件）のうち、最も多かったのが領内（国許）でした（35件）。庶民たちの多くは、自らが居住する村や町から欠落していたのです。これは、江戸時代を通じた一般的傾向であったとみられます。

もちろん、領外での欠落も一定数存在しました。江戸時代を通じて多かったのは、江戸での欠落です。その主な中身は、参勤交代で江戸に上った武士の従者として同行した武家奉公人が、当地で欠落したものになります。幕末期にも、江戸での欠落が9件確認できます。

しかし、幕末期、領外で最も多くの欠落が起こっていたのは、江戸ではなく京都でした（10件）。これには、幕末期特有の政治状況が関係しています。

［本研究の内容①――幕末期における京都での欠落増加とその背景］

京都での欠落は、元治元年（1864）に1件、慶応元年（1865）に5件、慶応2年に2件、慶応3年に2件と推移します。主に元治年間以降に増加する背景には、熊本藩による京都警衛という事情がありました。

文久2年（1862）以降、朝廷の命令を受けた熊本藩は、いくつかの外様諸藩と同じく、京都を警衛するために多くの武士を派遣します。それにともない、彼らの従者である武家奉公人も上京しました。京都での欠落の多くは、上京した武家奉公人で占められています。

彼らの供述調書によると、その主な欠落理由は、藩邸の門限などへの遅刻や、問題を起こして郷里の家族や親族に合わせる顔がない、というものでした。外出先で

泥酔して門限を逃した事例や、京都での生活で散財して借金を重ね、家族などへの面目を失ったとする事例が多く確認できます。なかには、京都で恋仲となった女性から引き止められたために帰国の出発刻限に遅れ、そのまま欠落に至ったとする足軽や、元治元年7月の禁門の変による大火で財産を失い、借金返済の目途も立たないために欠落したという下級武士もいました。

［本研究の内容②――その後、欠落者はどこへ？］

供述調書を読み解くと、欠落者がその後、どのように生計を立てていたのかについて窺い知ることができます。

領内外を問わず、多くの欠落者が従事したのが日雇稼ぎでした。とくに幕末期の京都では、多くの幕藩領主が長期滞在したことで、労働力需要が膨張し、稼ぎの機会が増えていたとみられ、実際に欠落者の何人かは日雇稼ぎを行っています。

京都での欠落者には、力士となる者もいました。武家奉公人として上京した玉名郡立花村（現玉名市）出身の藤次郎は、慶応元年（1865）4月に藩邸の門限を逃して欠落した後、松浦潟という相撲取りに弟子入りし、丹波国の亀山（現京都府亀岡市）で、一か月ほど稽古に励んだと供述しています（**史料2**）。

さらに、京都の治安を悪化させた欠落者も確認できます。欠落した足軽の山口角蔵なる人物は、元治元年（1864）1月頃、同じく上京した仲間とともに、京都の米屋で押借りを行っています。彼は、当時横行していた長州の浪士や諸藩の過激派による人斬りや強盗のため、町人が「帯刀之者」を恐れていることに乗じ、米屋の店主を恫喝して金銭を奪っています。また、盗みを繰り返した欠落者もいました。

このように幕末京都では、上京した武家奉公人の一部が欠落し、当地で日雇稼ぎや力士となるほか、押借りや盗みを行い、治安を悪化させる事態がみられました。

［本研究の内容③――幕末の時代相を象徴する欠落二例］

幕末期の「口書」には、当時の時代相を象徴するような欠落もみられます。特徴的な二つの事例を紹介します。

第一に、武士になることを目指し、国許から江戸まで出奔した百姓の事例です。文久元年（1862）9月、玉名郡二俣村（現玉名郡玉東町）の百姓であった権之助は、以前に同村から江戸に出奔していた次郎助なる人物の誘いを受け、出奔します。次郎助の誘いは、江戸で「水戸様」（水戸徳川家）の挙兵計画があり、浪人を募集しているから一緒に来ないか、計画成就の際には知行取に取り立てられる、というものでした。もともと農業が嫌いで「武士好キ」であった権之助は、この勧誘に応じ、次郎助とともに江戸へ向かいます。しかし、江戸に着くと、次郎助から商家への強盗に加わるように言われます。つまり、水戸徳川家への取り立て話は虚偽であり、実際には強盗集団の仲間集めだったのでした。強盗への参加を渋った権之助は、次

郎助から命を狙われることとなったため、翌文久2年正月、南町奉行所に次郎助の企てを訴えました。その後、権之助も欠落の罪状で熊本藩役人に捕らえられ、江戸から熊本へ移送されています。

第二に、江戸で問題を起こし、移送途中の大坂で欠落して、そのまま新選組に入隊した郷士（在御家人）の事例です。文久3年5月、山鹿郡新町（現山鹿市）の在御家人（郡代直触）であった保理井大助は、熊本藩から英学修行を命じられ、江戸に派遣されます。大助は同年7月、中津藩士の福澤諭吉が築地鉄炮洲（現東京都中央区明石町）の同藩中屋敷で開いていた塾に入り、英学修行を始めます。大助の名は、当時の福澤塾の塾生名簿「性名録」にも記されており、熊本からの慶應義塾入塾者第一号と評価されています。

しかし、大助は翌文久4年2月、新吉原の遊郭で深酒してトラブルを起こし、捕らえられてしまいます。熊本藩に引き渡された大助は、国許に移送されることとなりますが、彼は親類たちに面目が立たないと思い、慶応元年（1865）正月、船で移送途中の大坂で、同船していた吉武廣太なる人物とともに欠落します。二人は、そのまま京都へ向かいますが、当面の生活に事欠いたため、新選組に入隊したといいます。大助らは、食べていくために新選組に入ったのです。二人はしばらく新選組で過ごしますが、英学修行への願望が募った大助は、慶応2年6月に京都を離れ、横浜に向かいました。しかし、物価高騰もあって横浜での生活が困難となり、同年12月、大助は熊本藩の江戸上屋敷へ自首するに至ります。

慶応元年7月頃に作成された新選組の隊士名簿「新選組英名録」に、大助と廣太の名前はありません。そのため、大助の供述調書に基づく上記の内容は、彼の偽証という可能性も考えられます。しかし、大助の福澤塾への入塾が事実であることを鑑みれば、新選組入隊に関しても信ぴょう性が高いと言わざるをえません。彼らが入隊していたのであれば、新選組には、多様な理由による諸国からの欠落者が含まれていたことになります。近年の研究で、新選組は政治集団であると評価されていますが、その構成員は「国事」に関心をもつ者ばかりではなかったのです。

なお、保理井大助の供述調書は、熊本大学大学院人文社会科学研究部（文学系）の三澤純氏が発見し、その教示を受けた熊本県立美術館の宮川聖子氏が、同編『土方歳三資料館×肥後熊本藩』土方歳三資料館展実行委員会、2024年）で全文を紹介しています。本研究は、こうした成果をもとに、「口書」に収録された他の欠落者の事例もふまえながら、大助の事例の意義について検討を加えたものです。

［今後の展開］

幕末期を対象とする研究で、最も大きな蓄積を誇るのは政治史研究といえますが、近年の研究は政局分析に特化しがちとなっており、政局の周辺にある社会・経済などの諸要素が捨象されている、との批判がなされています。

本研究は政治史研究ではありませんが、幕末期の欠落者の実像を明らかにすることで、当該期の政治変動（京都警衛、浪士問題、新選組など）と彼らの動向が深く結びついていた点を明らかにしました。幕末期の政治変動は、積極的に「国事」に関わろうとした人びと（とくに武士）だけでなく、それとは異なる庶民の生のあり方にも大きな影響をおよぼしていたのです。

「口書」には、欠落以外にも多くの事件・犯罪に関する供述調書が収録されています。今後は分析対象の時期を広げつつ、支配領域や身分集団を越境（移動）することとなった近世後期の庶民の実像について、解明を進めていく予定です。

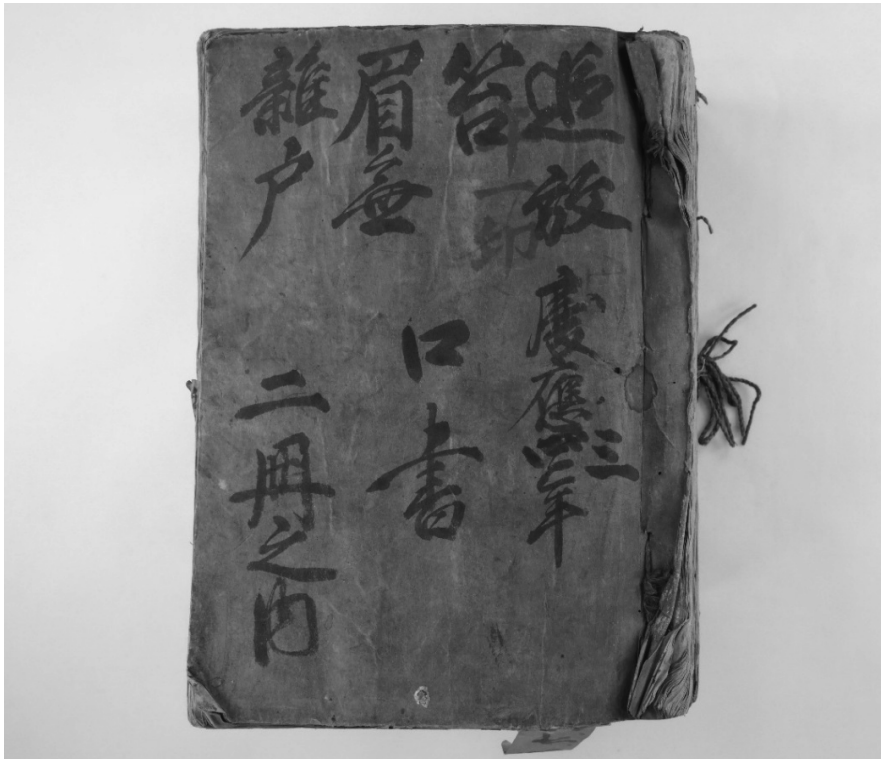
なお、本研究の詳しい内容は、今村直樹「欠落・出奔の幕末社会―細川家文書『口書』を素材に―」として、2026年3月末に刊行される『人文科学論叢』第7号（熊本大学大学院人文社会科学研究部〔文学系〕発行）に掲載予定です。

［用語解説］

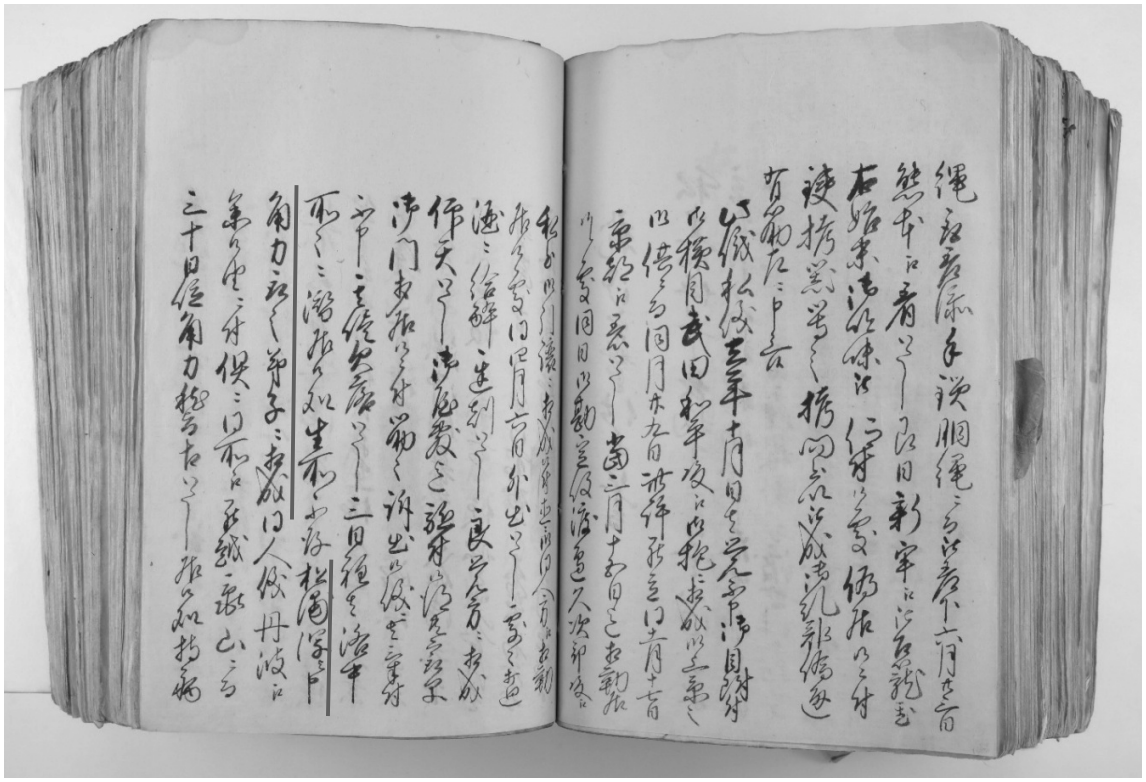
※欠落…江戸時代、貧困、悪事などの事情で逃亡し、行方をくらますこと。

※武家奉公人…江戸時代、武士の従者であった若党・足軽・中間・小者などの総称。このうち戦闘要員は若党・足軽で、ほかは武器・物資の運搬などに、また平時には家政上の雑役に従事した。

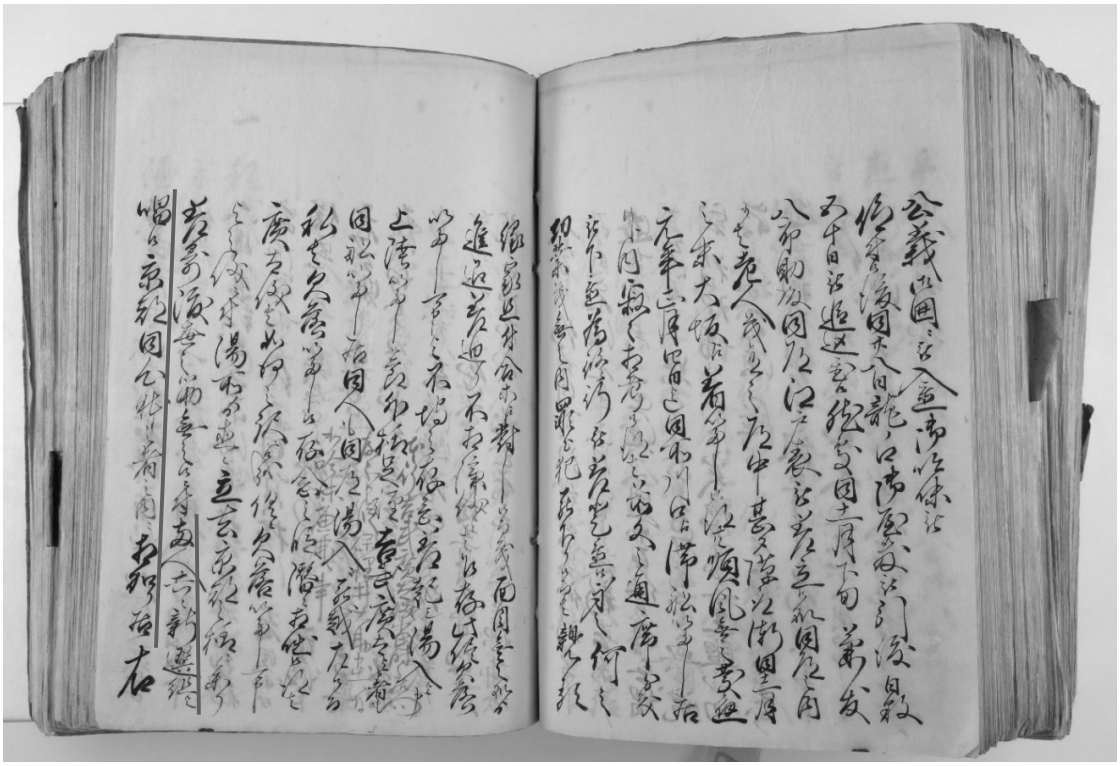
史料1　「慶応三年　口書」（目録番号14.7.4）の表紙



史料2　相撲（角力）取に弟子入りした欠落者（藤次郎）（「慶応二年　口書」目録番号14.7.2）※傍線部に、「松浦潟与申角力取之弟子ニ相成」とあり



史料3　新選組に入隊した欠落者（保理井大助）（「慶応三年　口書」目録番号14.7.4）
※傍線部に、「両人共ニ新選組与唱候京都同心躰之者之内ニ相加り居」とあり



【お問い合わせ先】
(研究に関してのお問い合わせ)
熊本大学永青文庫研究センター
担当：准教授　今村　直樹
電話：096-342-2304
e-mail：ikoan@kumamoto-u.ac.jp

（報道に関するお問い合わせ）
熊本大学総務部総務課広報戦略室
電話：096-342-3271
e-mail：sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

５．講演要旨

⑴ 稲葉継陽「加藤家改易から細川家入国へ―「天下泰平」と肥後の民衆―」

⑵ 今村直樹「神風連の乱と旧熊本藩主細川家」

加藤家改易から細川家入国へ

―「天下泰平」と肥後の民衆―

公開講演会・第19回永青文庫セミナー
2025年11月2日 於 熊本大学附属図書館
熊本大学永青文庫研究センター　稲葉 継陽

はじめに

⑴ 永青文庫研究センターによる基礎研究と今次の国重文指定

県内企業・市民の協力（永青文庫常設展示振興基金）／熊大寄託資料総目録の作成／文化庁・協力者との確認調査／廃藩置県以来の資料保全活動、現在、未来へ

⑵ 本講演のテーマ

細川家、肥後、幕藩制国家にとっての画期となった加藤家改易・細川家肥後移封は、寛永9年（1632）における家光新制・親政の一環➡その意味を肥後の民衆の観点からみる

1. 加藤家改易の公的理由と細川家肥後移封の国制的意味

⑴ 加藤家改易の公的理由

▼（寛永9年［1632］）6月3日 江戸幕府老中奉書 細川忠利宛（展示資料4）

①加藤忠広の子息豊後守が「不届の儀」（家光暗殺教唆）を書いて仲間に廻した
②忠広自身も「近年諸事無作法」で、そのうえ、
③江戸で生まれた子供と母親を幕府の許可なく国元に移すという「曲事」を起こした

⑵ 国家体制の枠組みからみた細川家肥後移封

▼（寛永9年［1632］）8月28日 細川忠興書状 細川忠利宛（展示資料5）

細川家肥後移封は「国のかたまり」
➡薩摩をおさえて九州の幕藩体制を安定させること、ひいては「天下泰平」のため
「隣国の押え」が熊本藩主としての任務だと自覚（細川光尚）、薩摩に密偵を派遣して島津家の情報を取る（熊本大学所蔵松井家文書）

2. 加藤忠広の「近年諸事無作法」とは

⑴ 忠広の酒乱狂気

▼寛永8年8月の忠興宛忠利書状案

この頃から加藤忠広の「気違」「日々夜々酒もり」といった、尋常ではない行状が目立ち始める
寛永期加藤家の権力には構造的問題があり、幕府は同家に見切りを付けざるを得なかったのではないか
①「加藤家中には統率できる人物がいない」（**寛永9年［1632］）6月29日 細川忠興書状 忠利宛**）
加藤家では元和4年（1618）に一門家老どうしが対立して幕府への訴訟沙汰となった御家騒動が発生
② 藩主・後継者が大名家当主として人格的にも未熟
諫言で忠義を果たす家老・家臣らの不在？　ex. 松井興長 諫言の忠義

⑵ 加藤家による「仕置」＝統治の無作法

▼（寛永9年［1632］）11月14日 出田権左衛門・阿久根一郎兵衛 覚 町原三允宛（展示資料6）

➡忠利熊本入城に先立つ11月14日に、加藤家の担当者が加藤家の地域支配の実情と地域社会の惨状を幕府上使衆・細川家に教示するため作成
①農村・山村・漁村への年貢諸税の賦課は25年も前の台帳によっており、実態と乖離した課税や高い年貢率が百姓の経営を圧迫
②家臣団も自分の知行地の村から勝手な基準で年貢を収納し、「無理之年貢」によって経営断絶する百姓が続出
➡高い年貢率の背景には上方市場への年貢米投入・換銀による加藤家の投機的経済構造があった（**寛永3年頃 加藤忠広書状加藤平左衛門宛［本妙寺文書］**）
③城下町の町人も各種の租税によって経営に支障をきたしている
④村方では継続する旱魃への対策も充分にとられておらず、特に宇土郡や益城郡などの旧小西領は放置

⑤百姓らの不満は、加藤家の郡奉行・蔵奉行と結び付いて不正をはたらく村役人（庄屋）らに向けられていた

3. 細川家熊本藩政の成立と肥後の百姓

【小倉藩以来の地域支配機構】　忠利―惣奉行―各郡奉行―手永惣庄屋―村庄屋

⑴ 難治の大国肥後を治める

▼（寛永 10 年［1633］）3 月 22 日 稲葉正勝書状 細川忠利宛（展示資料 8）

不正庄屋への対処法について幕府の了承を求めた忠利に、老中の稲葉正勝いわく「あなたのご自由に治めていただいて結構です！」

➡国持大名は拝領した国をうまく統治できてさえいれば、幕府からの干渉を受けることはなかった。しかし、逆にいえばこれは、統治が成り立たないならば、加藤家のように大名としての存立が危ぶまれることを意味する

⑵ 国中の庄屋らの能力・実績調査

▼熊大所蔵松井家文書（表）

領国中枢部では年貢請負いの実力、境目地域では惣庄屋家の武功の実績を調査・評価し、任用の判断材料に

⑶ 国中村々の年貢率実績調査

【大名領内の知行編成（知行割）】

1,000 の村の石高を御蔵納（細川家直轄領・代官支配）40%、家臣（給人＝知行取）の知行地 60%に分け、後者を約 900 人の家臣に配分する

▼細川忠利書状案稲葉正勝宛（参考文献・稲葉 2018）

約 1,000 ある村々の直近 3 年間の年貢率実績を調査し、約 900 人いる知行取家臣に知行高 40%の年貢率を保障しようとした

➡加藤家老・庄屋衆・小百姓から差し出させた数値はすべて相違し難航するも、寛永 10 年夏までには知行割をともかく完了

⑷ 百姓直訴制（目安箱の設置）の徹底

▼（寛永 10 年［1633］）細川忠利自筆達書（展示資料 9）

寛永 10 年 3 月 1 日から熊本藩領の「国廻」を実施

「次のように百姓らに周知せよ。訴訟は郡奉行に提起すること。今度の巡見では自分が聞き届ける。巡見中は宿泊先で直訴も受ける。目安箱を持参するので、記名した訴状を投入せよ。事前に命じた以上の饗応は必要ない」

▼寛永 10 年 11 月菊池郡百姓直訴事件（参考文献・稲葉 2018）←寛永 10 年 8 月益城郡庄屋 146 名集団訴願事件（同前）

菊池郡四丁分村（現熊本県菊池市四町分）の百姓が、折から肥後を巡検していた幕府の上使衆（監察官）に「直目安」を提出、直訴の内容

①新領主の細川家が百姓から麦年貢を徴収したこと

②旧領主の加藤家が前年までに百姓に貸与していた種子米を代替りに破棄せず、細川家が回収したこと

③寛永 10 年分の年貢の免率が不当に高いこと

（寛永 11 年）2 月 17 日 細川忠利自筆達書（『熊本日日新聞』2025 年 10 月 23 日掲載）

「藩政上の諸問題を百姓の目安を通じて具体的に把握し改善することが、肥後入国早々に目安箱を設置した目的であった。百姓は細川家設置の目安箱を用いて提訴すべきところ、その事情を充分知らず上使衆に直訴してしまった。（惣庄屋に預けた）2 人の人質は返し、よく耕作するよう申し付けよ。幕府領でもそうしているように、給人と百姓との紛争は、当該の郡の奉行に提訴するべきなのだ。このことを、「方々ニて目安上申」す百姓のために周知させよ」

➡伝統的な百姓公訴権を前提にした統治

⑸ 「私なき」統治（展示資料 10）の実現をめざして―寛永 13 年改革（参考文献・稲葉 2024）―

▼6 月改革（永青文庫「奉書」、表）

①郡奉行の人事原則の徹底

奉行の心得（展示資料 参考 1）

横領するな、権限をかさに着て不埒・無礼をするな、心を素直にして疑いや曲解を排せ

➡公私分離の「私なき」職務態度を求める

②百姓の経営への直接的梃入れ

③庄屋に対する政策→次項

④直轄領支配の模範的構築（展示資料 11）

▼**惣庄屋・村庄屋の処分**（表）

7 月から 11 月までに惣庄屋 2 名、村庄屋 13 名が次々と処分され、そのうち 3 名が誅伐・成敗

➡不正の嫌疑が生じた庄屋を郡奉行が取調べ、それをもとに惣奉行までのところで罪状を確定、さらにそれを根拠に誅伐相当との上申をすれば、忠利からも穿鑿を遂げた上で誅伐を執行

【罷免された惣庄屋・村庄屋の不正内容（罪状）】

①年貢米や百姓から回収された借米など、郡内の御蔵にプールされている現米の不正運用

②社会的評価に依拠した罷免（「悪くきこへたる庄やニ而御座候、御郡之見せしめニも被　仰付可然」）

③内検において領主側を欺瞞し、年貢現米の収取に直接的な損害を与えつつ私腹を肥やそうとした罪

⑹ **熊本藩「御国家」の成立**

▼**寛永 13 年正月 5 日 細川忠利達書 惣奉行衆宛**（展示資料 10）

「こんど国元に戻ったなら、御蔵納代官・郡奉行・惣庄屋の職務実態を自分に報告せよ。これら役人は、「私なき様に」職務にあたることが肝要である。個々の役人の不届きは、本来は「其身一分」の問題なのであるが、細川家による領国支配の在り方は隣国からも注目され、したがって将軍の知るところにもなる。役人の「下々」に対する「私成る儀」の押し付けは、「国のため家の為」のレベルの問題だと考えねばならない」

▼（**寛永 18 年［1641］）7 月 18 日 松井興長等 6 名連署血判起請文 住江求馬助宛**（展示資料 13）

忠利死去直後、家老衆は新藩主光尚に「「御国家」を「大事」にし私的利害を排除して職務に専念する」と誓約

➡「御国家」とは、細川の「御家」の組織と、統治の対象である「御国」（領国地域社会）とを合わせた概念。近世武士は単に主君個人に奉公するのではなく、「御家」と「御国」の永続のために奉仕するのが使命

➡近世初期における国持大名家の家老の政治思想の到達点を示す起請文

おわりに―天下泰平のための実践とは―

▼**忠利の師・藤原惺窩**（1561-1619）

代表著作である『大学要略』は、元和 5 年（1619）5 月の忠利や浅野長重らへの生涯最後の講義をもとにまとめられたもの。惺窩が朱子『大学章句』中の「天下を平らかにすることを国を治むると釈す」とのことばを注釈し、次のように論じたくだりが収録されている

「天下を平らかにするためには、君主が用いるべき人をよく観察して、「善人」を挙用することが第一に重要だ。第二に、天下の「土貢」（年貢）を程よく徴収して、万民が飢え寒がる事態をなくして、民を「養育」することである。天下の主人の「役」は、万民を飢えず凍えずして、「人倫」を教え、「善人」をもって治めさせる。これ以外にはないと言ってよい」

⑴「天下を平らかにする」ための理想的な統治はどうあるべきか。戦国世代の惺窩が現実との格闘の過程で得たことばは、教科書的な次元を超えたリアリティをもってポスト戦国世代の忠利に受け継がれ、実践を通じて肥後で具現化された

⑵ 当該期の統治思想上の頂点的姿を現実の世界へと引き出した根底的な力は、道理にもとる領主や庄屋の支配からみずからの歴史的地位を守ろうとする百姓らの運動から発した

【主な参考文献】

稲葉 継陽『細川忠利　ポスト戦国世代の国づくり』（吉川弘文館、2018 年）
稲葉 継陽『近世領国社会形成史論』（吉川弘文館、2024 年）
笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、1993 年）
柄谷行人『力と交換様式』（岩波書店、2022 年）
高谷 治「藤原惺窩の儒学思想」（『日本思想体系 藤原惺窩 林羅山』岩波書店、1975 年、所収）
戸田芳実『初期中世社会史の研究』（東京大学出版会、1991 年）
宮崎克則「近世初期の大名権力と奉行機構改編」（『九州史学』94、1985 年）

くまもと文学・歴史館 企画展「神風連の事件簿」関連イベント

神風連の乱と旧熊本藩主細川家

2026/02/21　於 熊本県立図書館

今村 直樹（熊本大学永青文庫研究センター）

はじめに

概要　明治９年（1876）、近代化（西洋化）に反対し、帯刀禁止令（廃刀令）をきっかけに挙兵した熊本敬神党（神風連）。旧熊本藩士であった彼らの行動とその動機を、旧藩主細川家との関係に注目してとらえ直す

◇ **熊本敬神党を理解することの難しさ**

・ 小早川秀雄『血史熊本敬神党』【小早川 1910】に寄せた池辺三山（吉十郎の子）の序文
「敬神党の事は、大野（鉄兵衛。太田黒伴雄―引用者註）、加屋（霽堅―同）二氏を地下に起して自ら説明せしめても、能く当世の人をして了解せしむることを得べきや否や、疑はしきことの極みなり。」

・ 渡辺京二『神風連とその時代』【渡辺 1977】第１章の冒頭部分
「神風連は私にとって、いろいろと試みてはみても、その意味なり位置なりをことばに定着することのまだむずかしいような、思想的な形象のひとつである。（中略）学者と呼ばれるような人びとの間で研究らしい研究がほとんど行われていないのは、（中略）そういう解釈上のある厄介さのようなものを、彼らもまた本能的に予知しているからではあるまいか。」
→国学者林桜園の思想を継承して西洋化を批判し、「宇気比」（神意）の戦いを実践した敬神党。But 多くの先人たちが、その思想と行動を正確に理解することの困難さに言及

◇ **学術研究で神風連の乱はどう評価されてきたか？**

・ 明治政府に士族独裁政権の樹立を求めた封建反動の一つとする、後藤靖の評価【後藤 1967】
→他の士族反乱と同様、時代に取り残された不平士族による武装蜂起という理解
←有司専制批判の論理に注目、自由民権運動との共通性を論じ、後藤を批判した猪飼隆明【猪飼 2012】
⇒両者の評価は対照的だが、神風連の乱に、他の士族反乱との共通性を見出す点では一致

・ 他方、神風連の乱の特殊性に注目し、「反時代的反乱」の精神的意味を問うたのが渡辺京二【渡辺 1977】
→市民社会文明と日本固有の信仰生活との不適合ゆえに、敬神党は近代化を拒否。彼らは封建的領主支配を超越した古代神政ユートピアを希求したと評価　cf.近代化で失われた伝統的民衆世界【渡辺 1998】

◇ **本報告の問題意識**

・ 神風連の乱が起こった明治９年…近世身分制や領主支配の解体から間もない時期＝近世・近代の転換期
→前代以来の意識や価値観がなお存続していた時期。敬神党の人びとはどうだったのか？

・ 近年の日本近代史研究…明治・大正期における旧藩主家と旧藩士族とのつながりを明らかに【内山 2015】
→とくに明治初年の熊本では、なお旧藩主細川家が大きな求心力を保持。神風連の乱との関係は？

・ 本報告の課題…旧藩主家の存在に注目することで、旧藩士らによる決起＝神風連の乱の知られざる側面を明らかにし、新たな評価を試みる

1.　明治初年の旧熊本藩主細川家と旧藩士族

(1) 幕末維新期の熊本藩

・ 激しい党派対立構造…藩庁および藩校時習館関係者の総称としての**学校党**、藩政の批判勢力として台頭した横井小楠の思想的系譜をひく**実学党**、国学者林桜園の影響を受けて尊王攘夷を主張した**勤王党**
→慶応年間には、勤王党の分派として太田黒伴雄・加屋霽堅らの敬神党（軽輩中心）が形成【渡辺 1977】

・　幕末期熊本藩がめざした政治体制…朝廷と幕府の融和による国内政治の安定、「政令一途」が目標
　→学校党は基本的に佐幕。維新後、新政府は熊本藩を警戒し、明治 2 年の東京では藩地削減の噂も流布
・　明治 3 年（1870）、新知藩事細川護久のもと実学党関係者が政権奪取（実学党政権）、藩政改革を断行
　→実学党の急進的改革（藩校時習館の廃止、洋学校の設置など）は、学校党・勤王党の反発を生む
・　明治 4 年の廃藩置県で護久は知藩事を免職されるが、新県政も引き続き実学党関係者が運営
　→明治 6 年、白川県権令に安岡良亮（旧高知藩士）が着任…実学党政権は終わり、「他県並み」の県政に
　＊　安岡を抜擢したのは大久保利通。白川県統治の困難さを説く【史料 1】…「難治県」としての熊本

(2) 廃藩後の旧藩主細川家と旧藩士族

・　廃藩後、東京府貫属であった知藩事（大名華族）やその家族は、旧藩地から「帰京」する必要あり
　→but 廃藩後の旧藩地からの旧藩主家族の東京移住は、必ずしも円滑には進まず【拙稿 2023】
・　明治 5 年 3 月付細川護久による家族の旧藩地寄留願【史料 2】…母の顕光院の病気、長男の長岡建千代（後の細川護成、当時 3 歳）と長女の嘉寿（同 2 歳）【図】の幼年虚弱を理由に、その熊本寄留を申請
・　廃藩後も細川家は熊本にいくつかの邸宅を所有…**北岡邸**（妙解寺跡）、**立田邸**（泰勝寺跡）、**砂取邸**
　→廃藩後、細川家は熊本城内の邸宅から引っ越し、護成や妹たちは北岡邸、顕光院は砂取邸に居住
　＊　こうした熊本の旧藩主家の邸宅は、旧藩士族にとって特別な存在。池辺吉十郎（学校党）は、廃藩後の明治 5-9 年の間、必ず世子護成がいる北岡邸などへ年頭挨拶に出向く[1]
・　廃藩後の旧藩士族は、保管場所を失った細川家歴代当主の甲冑類を自発的に預かる【拙稿 2018】
　→うち、少なくとも 5 名が敬神党[2]。党派関係なく旧藩主家を重んじた当時の旧藩士族（民権党は例外）

(3) 佐賀の乱と細川家・旧藩士族

・　明治 7 年 2 月、佐賀の乱が勃発…旧佐賀藩士族（征韓党・憂国党）は近隣諸県（鹿児島・白川〔熊本〕・三潴・福岡・長崎）の士族と接触。政府は、とくに旧熊本藩士（学校党・勤王党など）の蜂起を警戒
　→敬神党の一部は佐賀士族への呼応をはかり太田黒に神決を乞うが、神告は不可【石原 1935】
・　2 月 15 日、熊本鎮台兵は佐賀県権令の岩村高俊を護衛して佐賀城に入城。but 同 18 日、佐賀軍に大敗
　→佐賀派遣による鎮台の兵力不足を受け、旧藩士族の蜂起が懸念された熊本では混乱が発生
・　熊本鎮台は、学校党と対立する実学党関係者から砲兵を募集。but その一部砲兵が、細川家の世子護成の引き取りを細川家に求めたため、学校党関係者は激怒、北岡邸に大挙集結。一触即発の事態に【史料 3】
　→鎮台による兵力補てんのための募兵が、旧藩主の世子をめぐる旧藩士族間の激しい対立を惹起
　⇒当該期の旧藩士族による細川家への畏敬の念の強さとともに、党派対立の深刻さを物語るエピソード
　▽　旧藩士族の党派対立に根差した北岡邸をめぐる混乱は、神風連の乱でも再現されることに（後述）

2.　敬神党の決起とその旧藩意識

(1) 明治初年の敬神党

・　河上彦斎発議による手取塾・春日寺塾の開設（明治 3 年頃）。前者は軽輩、後者は士席が集まる
　→手取塾は敬神党の私塾的存在。春日寺塾では、のち学校党に転じる佐々友房らも学ぶ【渡辺 1977】
・　明治 6 年（1874）着任の安岡良亮は、敬神党懐柔のため、林桜園の直弟子や手取塾関係者を神官に任命
　→他方、敬神党の幹部である愛敬正元や阿部景器は戸長に登用。彼らが署名した行政文書も現存

(2) 帯刀禁止令と敬神党の決起

---

[1] 「明治五年壬申日記」、「明治六年癸酉日記」、「明治七年甲戌日記」、「明治八年乙亥日記」、「明治九年丙子日記」（池辺家文書、38～42、熊本県立図書館所蔵）

[2] 管見の限り、椋梨武毎（擬作 100 石）、三渕永次郎（旧知行高 5000 石）、古田織象（旧切米取）、樹本一雄（不明）、近藤武士（旧切米取）の養子熊三郎の 5 人が確認できる。

・ 明治 9 年 3 月、帯刀禁止令（太政官布告第 38 号）[3]発布。礼服や軍人などの制服着用時以外の帯刀を禁止
・ これに激昂したのが敬神党。加屋霽堅は直ちに東京に赴き、元老院に諫言書を提出【黒龍会 1908】
「我神武の国、刀剣を帯ることは、神代固有の風儀にして、国本頼て立ち、皇威頼て以て輝き、以て神祇を慰祭し、以て奸邪を禳除し、以て禍乱を戡定す。（中略）嗚呼尊神尚武の国体、須臾も不可離者、其唯刀剣乎。」
→刀剣とは日本固有の風儀の核心であり、抛棄すべからざるものという認識。実際、帯刀は武士に限られたものではなく、戦国・江戸時代を通じて多くの庶民も帯刀【藤木 2005】【尾脇 2018】
・ 同年 10 月 24 日夜、太田黒・加屋らに率いられた約 170 名が挙兵。県令安岡良亮、熊本鎮台指令長官種田政明などの邸宅や、鎮台の砲兵営と歩兵営を襲撃＝神風連の乱
・ 一同は愛敬正元邸に集まり、その後、藤崎神社に移動。太田黒は以下のように宣言【黒龍会 1908】
「神勅を奉じて奸吏を誅し、熊本城に拠りて義旅を募り、機に乗じて、師を輦轂の下に行り、内は奸臣の専横を罪し、外は黠虜の傲慢を責め、皇威をして八表に光被せしめん。」
→熊本城に拠りながら義兵を募り、機を見て軍を天皇のもとに進め、内には近代化政策を進める官吏の専横を罰し、外には欧米人の傲慢を糾弾することを宣言

(3) 神風連の乱参加者の旧藩意識

・ 太田黒や加屋らは近代化政策を進める政府への不満を動機として挙兵。but 参加者を募る際、その論理とは異なるかたちでの勧誘も存在
・ 岩越朴（旧知行高 100 石）の仮口供書【史料 4】…山田彦七郎（旧知行高 100 石）から〝土佐・因幡の旧藩士族とも打ち合わせ済みだ。我党も今夜鎮台を攻撃し、少将以下を討ち取る。その上で旧熊本藩知事を迎え、以前の細川家の治世に戻す。そうなれば立身出世は疑いない。〟と勧誘され、蜂起に同意
→山田は小篠四兄弟の一人。当初からのメンバーではなかったが、敬神党の思想に共鳴【石原 1935】
・ 石原朋来（元郷士）の仮口供書[4]…友人の江藤鬼角（旧切米取）から次のように迫られる
「此度旧知事殿ノ御指図ヲ以テハ代ノ松井隠居モ兼テ同意ニ付、近々ノ内鎮台ヘ乱入シ、将官以下一挙ニ打取リ、県庁ヲ屠リ、以テ細川家ヲ再興シ、旧藩政ニ復セントスルニ付、同意致スヘシトノコト…」
→旧藩知事の指図に、八代の松井家隠居も同意した。近日中に鎮台と県庁を攻め取り、細川家の再興と旧藩政への復帰を目指すので、挙兵に同意せよ、という内容
・ 上記の勧誘にはデマが含まれているが、敬神党の旌旗にも「細川正四位（細川韶邦―引用者註）帰国大再興」や「細川家御安全」などの文言[5]が記載
→旧藩主帰国や旧藩政復活という名分は、細川家を思慕する旧藩士族からの参加者を募る有効な手段に
▽ これらは細川家自身、関知しないものであったが、事件当夜、より深刻な事態が発生

3. 神風連の乱と細川家

(1) 事件当夜の北岡邸をめぐる混乱

・ 事件当夜、敬神党の蜂起を察知した学校党の佐々友房・深野一三らは、北岡邸に集結して事態を静観
→北岡邸の学校党からは熊本城で交戦中の敬神党に対し、応援を申し出る使者が派遣。太田黒の戦死後、それを受けた敬神党の一部は、北岡邸に向かう【渡辺 1977】
・ 敬神党の一部が北岡邸に向かったことには、もう一つの理由が存在…細川家世子の護成の擁立

---

[3] 「自今大礼服着用並ニ軍人及ヒ警察・官吏等制規アル服着用ノ節ヲ除クノ外、帯刀被禁候条、此旨布告候事。但、違犯ノ者ハ其刀可取上事」（『法令全書』）。
[4] 「事変神風党 七」（熊本県公文類纂 40-6、熊本県立図書館所蔵）。
[5] 同上「事変神風党 七」。

戸田寿八郎〔旧擬作高 100 石〕仮口供書[6]「一ト先、藤崎神社へ引揚ケ、夫ヨリ衆ト共ニ北岡邸ニ在ス旧知事ノ若君ヲ奉シ、以テ再ヒ揚旗致サン欲シテ、同邸ニ押寄候処…、」

・ こうした風聞を知った北岡邸では、大矢野次郎八らの護衛のもと、護成を旧宇土藩細川家の別邸があった桂原に避難させる。北岡邸の日記には「御立除一条いつれ茂苦心仕、紙上ニ難尽候事」とあり【史料 5】

・ 敬神党の一部は北岡邸に援軍を求めるが、学校党は拒否。一触即発の事態となるが、敬神党は退去
→敬神党の退去後も、邸内は「両御一門初県士余計ニ参集、大混雑」【史料 6】という状況
⇒細川家一門以下、多数の旧藩士族が護成の護衛のために北岡邸に結集する事態が再現！

(2) 旧藩主護久の決断――世子護成の上京――

・ 敬神党が蜂起した目的を、事件直後の熊本県はどう受け止めていたのか？

・ 10 月 26 日、熊本県令代理の桑原戒平は、太政大臣三条実美と内務省に事件を報告【史料 7】
「暴徒ノ目的ハ、兼而固陋ニテ西洋風ヲ嫌ヒ、散髪・洋服・靴抔モ尤之レヲ嫌ヒ、且封建ヲ主張シ、此節モ鎮台・県庁ヲ奪ヒ、旧知事世嗣ヲ擁シ、士族ノ人望ヲ得、然ル後入城シテ封建ヲ申出シ、各県ニ連及セントスルノ目的ト相見へ申候事」
→襲撃された県側は、敬神党が護成を擁立して、旧藩士族の協力を得ようとしたと認識

・ 敬神党挙兵の一報は、全国の旧藩士族にも影響。10 月 27 日に秋月の乱、28 日に萩の乱、29 日に思案橋事件と、士族による反政府行動が続発する事態に

・ 事件を報告する北岡邸の使者が、東京の細川邸に到着したのは 11 月 7 日。細川護久は、すぐに護成の上京を決断し、信頼する在熊の老臣道家之山に書状を送る【史料 8】
→護成について、道家ら旧藩士の意見もあり、熊本に寄留させていたが、「佐賀変動ノ時分」と同様、今回も「嫌忌ノ種子ヲ蒔ク之姿」となったため、上京を決断したと説明
⇒佐賀の乱と同様、神風連の乱による北岡邸の一連の騒動が、護久に世子の上京を決断させることに
＊ 12 月 9 日、護成は多くの旧藩士族に見送られて熊本を出発。21 日に東京の細川邸に到着

(3) それぞれの事件後

・ 敬神党の死者（戦死・自刃・刑死）は、参加者の約 7 割近くに相当…神風連の乱の際立った特異性
→阿部景器は再起を図ったが果たせず、自宅で自刃。妻以幾子も殉死＝「女の神風連」【渡辺 1977】

・ 北岡邸の関係者のうち、親族が決起に参加した者は、事件後、細川家に「心得方伺」（進退伺）を提出
→森繁夫（旧切米取）と女中の竹はいったん免職。北岡邸は、11 月 9 日まで臨時の警護役を雇用[7]

・ 世子の上京に対し、その熊本寄留を求めてきた旧藩士族は反対。『熊本新聞』明治 9 年 12 月 20 日付投書欄には、鹿子木小隠（旧藩士族）が「某先生」から送られた「公子東上ニ付懸念書」【史料 9】が掲載
→〝旧藩士族による旧主への忠は、朝廷への忠に及ぶものであり、それを否定してはならない（傍線部(a)）。敬神党の蜂起も、悉く「朝廷ヘノ忠意」に出て、「一毫ノ私念」もなかった（傍線部(b)）。事件当夜、北岡邸にいた世子護成の存在こそが、速やかな事態の鎮静をもたらしたのであり、今回の上京後に反乱が起これば、それを制するのは困難になる（傍線部(c)）〟
⇒事件直後の熊本でも、敬神党の思想を支持した旧藩士族は確かに存在。また、護久の認識とは異なり、旧藩主家の存在こそが、熊本の状況を安定させるものと「某先生」は積極的に評価
➡旧主への忠義、天皇への忠義のあいだで揺れ動く維新後の旧藩士族。敬神党も例外ではなかった？

おわりに

◇ **本報告のまとめ**

---

[6] 同上「事変神風党 七」。

[7] 「明治九年 日記」（細川家文書、22-2-91、公益財団法人永青文庫所有、熊本大学附属図書館寄託）。

・ 廃藩後の熊本では、旧藩士族間の激しい党派対立が存在。そのなかで党派に関係なく、畏敬されていたのが旧藩主細川家。ゆえに佐賀の乱時には、世子をめぐり学校党と実学党（熊本鎮台）が一触即発の事態に
・ 帯刀禁止令を契機として決起した熊本敬神党。but 彼らが掲げた名分には、旧藩主の帰国や旧藩政の復活も含まれており、それに応じた参加者が存在＝旧藩主への忠義も貫こうとしていた可能性
・ 佐賀の乱と同様、神風連の乱でも世子（北岡邸）をめぐる混乱が発生。事件を知った護久は、世子の上京を決断。当該期の旧藩士族は、天皇への忠義の前提として、旧藩主への忠義を重視＝移行期特有の状況
→敬神党が構想したのは古代神政ユートピア？旧主従関係を基礎とする新たな社会だった可能性は？

◇ **そして西南戦争へ**

・ 事件から間もない翌明治 10 年（1877）2 月、西南戦争が勃発。学校党・民権党は、西郷軍として参戦
→世子上京という護久の決断は正しかったか。事件後も熊本に残った護久の三人の娘たち（嘉寿・宜・志津）は、西南戦争の混乱に巻き込まれ、60 日以上の疎開生活を送ることに【三澤 2007】
・ 西南戦争の経験に上書きされた神風連の乱…敬神党を含め、時代転換期を生きた旧藩士族がどのような社会を目指していたのか、なお追究の余地あり

参考文献

・ 猪飼隆明「近代化と士族」（明治維新史学会編『講座 明治維新 4 近代国家の形成』有志舎、2012 年）
・ 石原醜男『神風連血涙史』（大和学芸図書、1977 年復刻版。初版は 1935 年）
・ 内山一幸『明治期の旧藩主家と社会』（吉川弘文館、2015 年）
・ 尾脇秀和『刀の明治維新』（吉川弘文館、2018 年）
・ 黒龍会編『西南記伝 上巻二』（黒龍会本部、1908 年）
・ 後藤靖『士族反乱の研究』（青木書店、1967 年）
・ 小早川秀雄『血史熊本敬神党』（隆文館、1910 年）
・ 藤木久志『刀狩り』（岩波書店、2005 年）
・ 三澤純「お姫様たちの西南戦争」（熊本大学『文学部論叢』93、2007 年）
・ 渡辺京二『神風連とその時代』（葦書房、1977 年）
・ 〃 『逝きし世の面影』（平凡社、2005 年。初版は 1998 年）
・ 〃 「神風連の乱」（『私の明治時代史』新潮社、2026 年）
・ 拙稿「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」（『永青文庫研究』創刊号、2018 年）
・ 〃 「明治零年代の士族反乱と旧藩主家・旧藩士族」（『日本史研究』731、2023 年）

永青文庫研究センター年報
第17号（2025年度）

発行日：2026年３月31日
発行者：熊本大学永青文庫研究センター
〒860－8555
熊本市中央区黒髪2－40－1
TEL　096－342－2304
印刷所：シモダ印刷株式会社